お雪幸七（ゆきこうしち）

橋本埋木庵作

特108
631

お雪幸七

橋本墁木庵作

玉鳴館印行

文部省
内交
30

樋口隆文館新刊小說目次

江見水蔭君作　蠻勇の人
渡邊默禪君作　紅蓮の炎
橘木埋木庵君作　繼しき母
瑠璃生君作　かくし兒
齋藤溪舟君作　まん橋八
篠原嶺葉君作　田鶴子
遠藤柳雨君作　須磨子と千代子
行友李風君作　人の怨
嶋川七石君作　密航婦
和田天華君作　憐れ誰が兒ぞ
山田松琴君作　ゆめのあと
齋藤星瀾君作　二人の花聟

樋口隆文館より出版せる小說は全國各地の新聞紙上にて多大の好評を以て迎へられたる物ですから御覽なれても至極面白うございます

お雪幸七

（一）

橋本埋木庵

舊仙臺藩主伊達御一家の中にでも、其の上位たりし泉田大隅は、祿高千五百石を領して、世々磐井郡東山の薄衣城主たり、時は文久三癸亥の年の秋の末、農家は孰れも其の年の收穫を濟して、下戸は新米の餅に腹膨らし、上戸は手釀の濁酒に舌鼓を打鳴して、老者も若者も打興じての豊年祭り、其が中に、東山中川村の百姓清水長太夫(四〇)一人は、何か心に懸る事もやありけん、日常より好める手釀りも飲まず、唯茫然と腕を組んで考へゐるにぞ、妻のおあさこのとき三十八才は是れを氣に懸

け。

「モシお前さん、何を其の様に考へてゐなさるのですね、心地でも悪いので御座いますか、其んな時は口の開立でも上燗して、一ト燗鍋も飲つたら、氣も晴れませうさうしたが可う御座んす」

と、健氣に夫の機嫌を窺れど、長太夫は尚ほ鬱いて返事もせず、霎時して溜息を吐きながらおあさの方を見向き。

「イヤ、酒も飲たうはないよ」

「かれでは何處ぞ惡い處でも……、胸でも痞るのなら何か、合藥など購て來ませうか」

「別に胸の疼むのでもないが、實は如何して可いかと、考へねばならぬ事が起つたのでな、此の間中から俺は、恁うして色々と心配をしてゐるのだ」

「爾うで御座いますか、而て其の心配になる事と云ひなさるのは、そりやア一体、何んな事なんで御座いますね、倘し氣に懸る事がありますなら、足はぬ女性でも連

添女房、遠慮なしに相談を爲すつてお呉んなさい」

「イヤそりやア爾うとも、お前も知つての通り、俺は恁うと云つて相談をする親戚とてもないのだから、何事も力に憑むはお前一人だ、何の遠慮などするものかな」

「私とても其の通り、此の家に嫁いで十八年、其の間里方の兩親には死別れ、外に憑む姉妹はなく心細くは思ひますが幸ひ、二人の子供が孝心深く、旋てはお前さんの片腕になつてと、それば かりが私の樂み、其の中でお前さんに体でも惡いと云はれますと、私は何の樣に心配になるか分りませんよ」

「そりやア俺とても同じ事だ、底で俺が昨今心配をして居ると云ふのはな、外でもないが、おあさ聞いて呉れ、お前も知つての通り、西寄の畑續きにある、彼の小立林は俺の家の所有地だ、然るに、二三日前俺が見廻りに往つて見ると、何者かは知らないが、俺に斷りもなく、雜木林を殘らず伐倒し、其の跡の根固を掘て開拓し、六分通り畑地に直してあるぢやないか、俺も駭いたのぢや」

「おやまア爾うで御座いますか、一体まア、誰が其んな事を爲たので御座いませう

ね、他人の所有地を……」

「俺も余んまり不審でならないから、内々で村の衆に聞合して見たのだ、すると例の那奴だ彌太夫だ、何とおあさ、無法な男ではあるまいか」

「アラ爾うで御座いますか、まア何と云ふ無法な事をするんで御座いませうね、自分の田地田畑が有余る程あるのに、他人の所有地まで無斷で樹を伐り、其處を開拓して自分の畑にするなんて、ですがねね、お前さん何ぼ彌太夫だつて其んな無法は通るものではありませんから、充分に談じて伐た木や地所を、殘らず此方へ取戻すが可う御座んす」

「勿論それが當然だから、爾うする心算では居るけれども、那奴却々の曲者、道理に服て渡す樣な男でないのだ、亦、お上向も例の手段で都合可く、乾度執拂へて置てそれから、那な事を爲たものに違いあるまいと考へるが、さて爾うなると、俺の方に何位に理由があつても、執揚て下さらんと云ふとな、道理を以て爭つてもねつから駄目になりはせぬかと、俺はそれが心配で好きな濁酒も飲めねねのだ」

「御道理で御座いますけれども、其の樣な無法な事を爲れて默つては居られませんね」

「そりやア爾うだとも、相手が誰であらうとも、無法な事を受けて默つては居られぬが、俺は他人と爭ふ事は性來好まない男だ、殊に那奴の樣な非道の男、何んな目に遭かと思ふと、俺は心配で堪らないのだ」

「眞個に爾うで御座います」

と、夫婦は他人に權利を侵されながら、如何して可からんと止つ追つ、思案に心を苦め居た。

（二）

同じ中川村の百姓に、熊澤彌太夫三十九と云ふ者あり、同村屈指の豪農にして舊家と云ふにあらねど、二三代も續きし當主彌太夫は性貪慾の上、心飽まで獰猛の男な

るが、豪農と云ふを蓋に被て、村内の小百姓を虻虫の如く見做して、横暴の擧動のみ爲し居れども、渠は却々の横道者とて、其の向きの小役人們に密かに金物を賂賄何事も我意を通すをしたり顔に益す圖に乘り、亦農夫として雇ひ置く者も、大力は博徒の群なれば、偶ま渠の横道を憤慨して爭ふ時は、忽ち惡漢們が立現れて暴行を加へらるゝに、村人は孰れも渠を蛇蝎の如く怖れ憎めど、後難を受くるが悲しさに無理が通らば道理は引込めと、云はぬ者もなかりしが、似た者夫婦の比喩の如く、妻のお辰三十五と云ふ女も、夜叉に均しき心根にて、是れとても村人誰一人として褒る者ない、恁る程なれば、此の程より數人の雇ひ農夫們を指圖しつゝ、己が畑地に續ける長太夫が所有の雜木林を伐倒し、此處を開拓して無法にも我畑に加へたるを見て所有者なる長太夫は大に驚きながら、妻のおあさに相談の上彌太夫に談せんものと我家より數丁隔つた彼の畑地に赴きたるに、幸ひにも彌太夫は、二人の農夫と共に横領地の畑を頻りに耕し居た、それを見るや、長太夫は憤慨に堪ねど、相手が相手なればと詞を柔げ。

「イヤ是れは彌太夫どの、今日は好いお天氣さまで可う御座いますな」

と詞をかくれば、彌太夫は横柄に突立た儘。

「や、長太夫さんか、今日は寔に結構な天氣だな、如何だね、本年は大分收穫が澤山だつたらうな」

「イヤ、俺們などは多寡が知れたもので御座いますが、お前さん處などは大したもんで御座いませう」

「それ程でもないがね、したが三年ぶり位ゐは收穫だらうよ」

「それは寔に、結構な事て御座いましたな、時に彌太夫どの、此の間中よりお前さんにお目に蒐つて少し御相談いたしたいと思つて居ましたが、今日は幸ひ此處でお目に蒐りましたから、少し話をいたしてねでがす」

「ウム爾うか、何か用があるのか、俺らお前も知つての如くで、用が多いので朝から家にやア居ねねのだ、折角來て呉れたつて逢れねねから來て呉れたつて無駄だよ而て何んな用かねつ」

「外でも御座いませんが、此の畑地でがす、何時の間にかお前さんが、樹を伐て開拓を爲て居なさるが、此處は俺等の所有地で御座いますのに、お前さんが慾う云ふ事を爲さる筈はねゑ筈かと存じますが、一体是れは如何云ふ理由で御座いませうか」

「何ッ、此處はお前の地所だッ、お前は何を證據に其んな馬鹿な事を云ふのだ、大方夢でも見て其んな事を云ふのだらう、面でも洗つて、考へて見た上で云ふが可からうせ」

「ヘィ而て見ると何かねッ、此の地所を舊から、お前さまの地所だと云ひなさるのかねッ」

「其んな事は云ふまでもねゑよ、昔しから此處は俺等が所有て居る土地で、如何爲やうとも俺の勝手だ」

「彌太夫どの、それは無法と云ふものでありませうぞ、現に此の雜木材は、俺が八年前に植附た樹で御座いますせ、お前さまこそ何を證據に、其んな事を仰やるので御座いますか」

「やかましいやい、餘計な文句を吐かしアがると、叩き倒すぞッ」

此の無法に長太夫は愛時は呆氣に取れ居たるが、渠の無法に辟易て引込んで居ては此の山林も畑も渠に横領せられんと思ひつゝ立進み。

「お前さんは何を證據と云ひなさるかな、此の地所が昔しから俺の家の物だと云ふ事は、村中の人が承知して居りますし、それでもお前さまが無法な事を云ひなさるなら、事は好まないがお上へ訴へて、鷲か鳥か裁て戴きますから、可うがす」

と云ひ捨て、長太夫は其の場を立去んとすれば。

「ウハヽヽヽア是れさ長太夫さん、お前も短氣な男だな、お前と俺の仲で、お上沙汰を仰ぐとは面白くねゑ事だ、何とかお迭ひに笑つた相談をするから、マア待なせゑな」

と、追がの無法者も我を折て、長太夫を引留めた。

（三）

素より事を好まぬ長太夫は、彌太夫の心の底を酌兼て立戻り。

「彌太夫どの、笑つて相談を爲て下さるヲ、今も俺は云つた通り、事を好まぬ性分だからね、平和に相談が出來る事なら、是れに越た事はないのだ」

「お前の云ふ事は如何も道理だ、俺が善なかつたからまア腹を立すにな、切望勘辨をして呉んなせね、此處を俺の所有地と思つたのは全く、是りやア俺の考へ違いだつたのだ、處を此の儘お前の方へ取れて仕舞……そりやアなる程、取れたからつて理屈を云はれた義理ぢやアねねが、其處はお前と俺の仲だ、俺が全部損するのを見て歡ぶお前でもあるまい、なア長太夫さん左うぢやないか」

不敵の曲者も理の當然に敵し兼てや、寔に平和な相談を望むものと思へたれば、長太夫は打喜び。

「イヤ御道理で御座います、お前さまに損を蒙けて喜ぶ理由は少しも御座いやせん其處は何のやうにも、理合さへも明瞭になれば、俺們の方で損を受けたつて構へません」

「それで俺も安心した、ちやア少し待て呉んなせね、鳥渡協商する者がある、まア煙草でも吸なせね」

と云ひつゝ、彌太夫は那方に木の根固を堀り居たる二人の農夫の處へと歩み行き、暫時何事か密々と暾きたる上、旋て三人は手に手に研鎌や鍬鋤を携へて、長太夫の居る處へと來た。

「お前さまが長太夫どんかねッ」

「ハイ、俺が此の村の長太夫でがす、お前さんも矢張村の衆か」

「ハイ、同じ村の者だが、長らく彌太夫旦那の世話になつて居る者で、有藏に伊勢松と云ふ者でがす、處で今彌太夫旦那の話に聽きやすと、此處の畑と山林はお前さ

んの所有だとか云ひなさるさうだがそりやア大きな云ひかゝりと云ふものだ、此處は確かに熊澤の先代から所有て居るてゝ事を聽いて居るのだ、お前さんが其んな無法な事を云ふなら、俺們の於で承知が出來ねゝ」

「實ア此の兩人に協商した處が、此處は伏して其んなものではない、先代から全く所有して居る處で、爾う云ふ長太夫が無法だと、何處までも此の兩人が證人だ、就ては、お前の方が間違て居るのだから、今後とてもある事だに因て、以來其んな事は云はないと云ふ一札を出しなさい」

と、茲に協商の方寸が心機一轉したのに、長太夫は又も呆れて返事も出でず、良ありて。

「お前さまにも似合ない詞と云ふものだ、此の大事に村の若者位ゐを證人に立て、今更其んな事を云はつしやつたからつてそりやア無駄だ、殊に是れから後も苦情を云はぬと云ふ一札を出せつ、イヤ人は知らん事、此の長太夫は其の樣な一札は出せません」

「ウム、ぢやア如何あつても、お前は其の一札を出せねゝと云ふのか」

「出せませんとも、出す理合がない一札は出せません」

「ぢやア長太夫、俺の詞に隨はれなけりやア協商も是れまでだ、手前の氣に入やうにお上へ訴へるとも如何するとも勝手にするが可いや、爾う云ふ料見なら此方にも料見があるッ」

「事は好まないが、お前さんが爾う云ふなら仕方が御座いやせん」

と長太夫は、叭煙草入を腰に携て其の場を立去り、五六步往くや彌太夫は、四邊を檢ながら惡漢有藏等に眼配せして、傍らにありし大なる研鎌を携へ、密かに長太夫の跡を尾行、二三步に接近するよと見ゝたるが、不敵の彌太夫は、携へたる鋭き研鎌を振抗て後部より。

「己れっ」

と云ひさま、長太夫が腦天に鞳込んだ、不意を喰たる長太夫は、急所の負傷に。

「アッ」

と悲鳴の一聲、其の場に撞と倒るゝを再び肩先へ深くも轉込んだ處へ、有藏、伊勢松の兩惡漢も、鋤鍬にて左右より滅多殿り、無慙や罪なき長太夫は、眼も當られわ慘狀にて息は絶た、斯て三人は長太夫の死骸を視ながら。

「此處に恁う打捨てもおけめから、二個で穴を掘つ」

と、此處に穴を掘せて死骸を投込み、上から土を被せて是れで好しと、悠然此の場を立去りたるぞ不敵なる。

《四》

貪慾非道の彌太夫が毒手に罹りて、無慘の横死を遂げた長太夫夫婦の仲に、長女お雪（十七）、長男幸七（十四）の二人あり、姉妹共に孝心深く、殊に姉のお雪は天成の美人にして、中川村はおろか、東山中にも是れに比ぶべき玉はない、弟幸七も又、未だ幼年ながらも骨格たくましく、農家の子女に稀なる學問さへ好みて精を

出し、其のかたはら父母の農業を助け居た、此の日父の長太夫が那邊へか出行し儘黄昏ころに至るも歸宅せざるに、妻のおあさは云ふも更なり、二子も共に是れを心配しゐたるが。

「阿母さん、爾うして阿父さんは何處へも仰有らなかつたんですかね、畑に行たにしては、大層遅いでは御座いませんかね」

「何處へ往とも云つちやアお出なさらないが、西寄の畑續きの雜木林を、誰かは知らず伐倒して、持去たとか云ふ事でね、大方其處を撿にお出なすつだのかも知れないよ、併し日の暮るまで其處に居なさる筈はないから、それから外にお廻りなすつたのであらうが、それにした處で、夜までお歸りなさらぬと云ふ筈はないのに……不思議だね」

「ちやア阿母さん、何處へ廻つたのか私が迎ひに往て來ませうか、立寄つた先が知れませんかね」

「爾うだね、お廻りになつた處が知れて居れば、私とお前と二人で、提灯を持てお

迎ひに往きませうねゝ阿母さん、阿母さんには先が分りませんかゝね」
おあさは小首を傾けながら考へ居たるが。
「爾うさね、私にも何處と云つて心當りもありませんが、倘つとしたら、村の熊澤彌太夫さんの處へでも、立寄りは爲ないかと思はれますが、爾うとした處で夜分になる樣な事はない筈、如何しても不思議で堪らないのねゝ」
「ですけれども阿母さん、家の阿父さんは、平生親友して居る彌太夫さんでもありませんから、那處へ往筈はないかと思はれますが……それとも、何か用でもあつたんで御座いませうか」
「彌太夫さんに逢て是非とも話をせねばならぬ用があるのだが、今日屹度往とも仰やらなかつたよ」
「へゝ爾うで御座いますか、それでは彌太夫さんの家かも知れませんねぢやア、幸七を連て提灯を持て、お迎ひに往きませうねゝ幸七、爾う爲やうではないか」
「姉さんが往なら、ハイ私も一緒に行きます」

「彌太夫さんの處までは大變だ、十丁の餘もある處へお前方二人を、是れからやつては私が又心配です」
「何、大丈夫です十丁ばかりの處は、何でもありませんから往つて來ます」
と、お雪は弟の幸七を促して提灯を携へ田野の闇路を振照して父の迎へにと出往きぬ、斯て二人は、熊澤彌太夫方を始め、順路も心當りを聞合せ見たれど、孰れへ往て尋ねても、今日來たらぬとのみ云はれて、二人は詮方なしと小夜更くる頃、悄然として我家へ立歸つて來た、案の條母のおあさは、迎へにと出往し二人の歸り來たらぬに、重ねて心配し居たる處へ二人は、父を索し得ずして歸り來たるをそれと見る母のおあさは、門口へと立出し
「如何したゝ分りましたか、お前達まで餘んまり遲いもんだからね、私は一層心配で堪らなかつたのよ、彌太夫さんの處では何と云つて居ました」
力なげに歸り來たお雪は、泪含んで家へ入り。
「阿母さん、阿父さんの行先は、如何聞き合せて見ましても分りませんよ、如何し

たので御座いませうね」

「爾うかね、まア如何なすつたんだらうね、而て彌太夫さんの處では、一度も來ないと云ひましたか」

「ハイ、彌太夫さんの處ではね、お前處の親父などは、俺の處へ來る用がない筈だから、來ないと木で鼻を括つた樣な挨拶、それから其の近所も四五軒聞合せたのですが、長太夫さんは頃日中から、顏が見ないとばかり」

「へゝ、而て彌太夫さん處では、誰が爾う云つたのですね」

「ハイ、それは那の內儀さんが……」

「彌太夫さんも居てッ」

「彌太夫さんは奥の間に、二三人の男の衆と、酒でも飮んで居るらしう御座いました」

と、語り告げた。

（五）

母子は其の夜寢もならず、案じ居るまに早くも夜は明ぬれど、尙ほ長太夫の歸り來たらぬに母子は、是れはいよ〳〵唯事ならずと、氣も狂はんまでに心痛し居たるがおあさは屹と思案し。

「ねゝお雪、夜宵から色々と考へ通り阿父さんは、雜木林を伐て其の跡を人夫を入て開拓し、畑地と直して居る者があるのを發見したのでね、何者か無斷で、俺の處の地所を斯んな事爲たのだらうと、段々探つて見るとそれは、村內でも豪農と云はるゝ其の彌太夫さんだと分つたが、お前も知つての如く、彌太夫は村中での雷さま、如何したものかと大層御心配なすつて居たのさ、併し外の事とは違ふから、打捨てはおかれない如何しても彌太夫に談じて、取戻すと云はれて居ました、それから察すると昨日は其處へ出て往なすつたのかとも思ふ

のです、それぢやと云つて今まで、其處に居なさる筈もあるまいけれども、何となく私は胸騒ぎがしてなりませんから、是れから其の西寄の畑へ往て檢て來やうと思ひます、ねえお雪、幸七を留守番に置て、お前も一緒に來てお呉れ」

「眞個に爾うで御座いますね、對手が那な無法な人ですから、間違ひが出來ないとも限りません、ぢやア阿母さん速く往て檢ませう」

「ぢやアねえ幸七、私は姉さんと西寄の畑まで鳥渡往て檢て來ますから、お前は留守番をして居てお呉れよ」

「阿母さん、己ア留守番をして居るのも可いけれど、留守番は婆ちやんに爲せて、己ア一緒に往たいな」

「お前が爾う思ふなら、ぢやア一緒にお出で」

と、留守番は本年六十九になる長太夫の實母一人を殘して西寄の畑へと來て見れば果して雜木を伐倒して畑に開きし處は、既に半丁歩もありて別に人の居る樣子も見ねりしが、母子は甲處乙處と見廻しながら、

「お雪まア御覽よ、なる程阿父さんの仰やつた話の通り、此の雜本を伐て持去つたばかりでも大變な物だのに、跡を畑にして横領しやうとは、隨分無法な仕方ではないかね」

「眞個に、餘まり無法で御座いますね、是れは全く那の彌太夫さんが爲たのでせうか」

「此の村の衆に、斯んな事をする人は外にありは爲ないよ、實に憎らしいではないかね」

「餘んまり酷い事をするもんですね」

と、現場の狀況を檢て切りに憤慨し居たる折しも、幸七は何物か風と拾ひ取て是れを檢ながら。

「鳥渡姉さん、御覽よ此處に此んな物が遺て居たせ、是れは家の阿父さんの吸煙草入ぢやアないか」

と、云ふにお雪は愕り。

「何ッ　阿父さんの煙草入があるッ、ごれ快くお見せ、眞個かね」

「詐なものか是れだ〳〵、オヤッ、血が大變に泌んで居るよッ」

「何ですと、煙草入に血が泌んで居るねッ」

前宵より唯事にあらざるべしと、胸を痛め居るおあさは、血と云ふを耳に忽ち悄然として駈寄り、其の叭煙草入を取揚て檢れば、果して長太夫が前日立出る際、腰に携ゆける叭煙草入にして、見るさへ怖しき程血が附着しあるに、おあさとお雪は、是れを見てハヤ顔色を變て身を顫はし居た、お雪はワナ〳〵と顫ふ手に血の泌みし叭煙草入を母の手より受取り。

「阿母さん、其りやア如何したんでせうね、倘しや彌太夫と喧嘩でも爲すつて怪我をしたのではありませんかしら」

「お怪我を爲すつた位ゐなら前宵の中に歸つて見ゐる筈ですが、私はそれよりもモツと大變ちやアあるまいかと、怖しく思ふのです」

「ア、此處に手拭がッ、まア此の手拭も血塗らけですよ」

「何、手拭も血塗けッ」

と云ひながら、那處らに氣が注て見ると、處々に夥だしき血の塊りやら、血汐の滿へた痕さへ明現と認められしかば、母子は愈よ狂氣せる如くに打驚きつゝ、立騷ぐも無理はないのだ。

（六）

母子は狂氣せる如くに驚きながらも、おあさは氣を勵まし。

「是れさお雪や、此處で泣て居る處ではありません、是れサア何でも阿父さんは、此處で殺されたものに相違ありません、若し爾うとするとね、此の邊の木立の中に死骸を捨てあるかも知れませんから、快く村の衆を呼んで來て手を借りて探して見様ではありませんか、此の血ちやア何でも、殺されなすつたものに違ひありませんから、氣を確かに持て其の敵を……」

此の一言にお雪は氣を勵まされて、聲く胸を押し鎭めつゝ。

「阿父さんは如何しても殺されなすつたのでせうね、呀ア誰ぞ村の衆でも來て呉れゝば可いが」

と、母子は顔見合せて雫時愁然とした。

折柄、五六間那處に何事か索し居たる幸七は、何かは知らず遽だしく駈來たりて。

「阿母さん、那處にも大變血が淋漓ゐるよ爾うして何だか穴を掘つて埋たやうな跟があります」

「へゝ、穴を掘て埋たやうな……鳥渡お雪、若しや阿父さんか」

と、二人は幸七に誘はれて五六間歩み行き、唯見れば果して幸七の報るが如く、亦其の附近にも血潮の塗れたる處もありて、如何さゝ死骸を埋沒したるらしき形蹟あるにぞ、おあさとお雪は打頷きつゝ。

「阿母さん、此處に相違ありませんよ、如何かして掘て檢たいものですね」

「姉さん、俺ア先刻來る時鍬を携つて來ましたから、ちやア己が掘てやらうか」

、眞に爾うだつたね、快く持て來て掘てお呉れ」

と云はれて幸七は甲斐々々しく、擔ぎ來たれる小鍬を入て土塊を掘括げ始めたるに一尺五六寸も掘るや忽ち、現はれ出たは長太夫の死体だ、それよと三人は夢中になつて、辛くも長太夫の死体を掘抗げて打檢れば、コハ其歟いかに長太夫は、頭部は二個に割るまで斬られし上、身体數ケ所に重傷を負されて見るも無慙の最期、それと見たる妻子は、何かは堪るべき、おあさとお雪は左右より死骸に取縋りて。

「長太夫ざの……阿父さん……如何なすつたので御座います長太夫ざの……阿父さん」

と、聲を限り呼べど答への亡き骸に、三人はびたと取附て雫時は正体もなく、悲しむ慘狀の哀れさは、拙なき筆に盡し難し。

「お前さん、此の樣に慘たらしく誰に殺されなすつた、嚊ぞ殘念で御座いましたらう、此の怨みは屹度霽して進ますから、何奴が恁う云ふ事を爲たのですか、夢にでも可う御座んすから、切望知らせてお呉んなさい」

「阿父さん、何なにか御無念で御座いませう、私も口惜う御座いますが、仕方が御座いませんから此の上は、私と幸七と二人して、屹度敵を索ねてお恨みを晴して進ます程に、今も阿母さんが云はれましたる通り、夢にでも現にでも仇は何者か、是非とも敎へてお呉んなさい、大方那の彌太夫で御座いませう、阿父さん何故返事を爲すつて下さらないので御座います」

「是れさお雪や、私にもそれらの心當りはありますが、滅多な事を口走つて此の上にも、如何なる憂目に遭やも知れませんから、必ず其のやうな事を……ねゝ解りましたか」

「ハイ解りまして御座いますが、阿母さん、何時まで此處に恁うしては居られませんが、如何したら可う御座いませうね」

「人に殺されたとなれば、何と思つても此の儘家へ連て往く次第にはなりません、一應お上へお訴へをして、御檢視を受けた上でなくては……就てはねゝ幸七、お前は男だ泣て居る處ではありません、兩隣りと向ふの家へ往て此の由を報てね、叔父さん方に御迷惑でも直ぐと來てお呉んなさいと、爾う云つて願つてお呉れ」

と云はれて幸七は、泣々立去りて母に云はれし如く近所の人々に報じたるにぞ、旋ては村中の大騷ぎとなり、檢視の役人も出張して制の如く檢視を執行はれし末、長太夫の死体は妻のおあさに引渡された、斯て母子は、如何歎き悲しめばとて亡人の甦り來る術もあらねば、村の人々の同情の涙を得て、野邊の送りを濟した。

（七）

夫の死骸を引渡された妻のおあさは、涙ながら野邊の送りを濟したる後、或日檢視の役人に呼出されて取調べを受けしを幸ひ、熊澤彌太夫が我們所有の雜木林を、無斷で伐倒したる跡を開拓したる事を發見し、憤慨して其の話に出懸て思はざる災難に罹りたる云々と申立たるにぞ、檢視の役人も、十の十まで長太夫を殺害したるは同じ村の百姓熊澤彌太夫なりと認定して、愈よ彌太夫を召捕らんと既に其の手配り

さへなりしを、それと知りたる彌太夫は、遒がに不敵の曲者も是れには大に駭きたるがされど、肝智に長し曲者とて、機敏も捕方や其の他向々の小役人們に、例の如く密かに金品を贈りて、其は全く見込違ひなりと云ひ觸させ、終に其の儘、天網を遁れてしたり顔に村内を横行するにぞ、それと聽く長太夫の妻子は、上役人を恐れぬにはあらねど、是れでは餘りと云へば片手落し、現在敵は彌太夫と十指の指す處なるに、其の儘に爲しお置るゝとは何事ぞや、斯くては憑みと爲す神も佛もなき世なるか、此の上は是非に及ばず、私の仇討は上の掟の許されぬ事なれども、人を殺し大惡大罪人を、其の儘に捨置るゝ上はいたし方なし、と、おあさは人なき折を幸ひお雪と幸七を手許に呼寄せた。

「阿母さん、改たまつて何か御用で御座いますか」

おあさはふり落る涙を拭ひて嚴然となり。

「お前達も知らるゝ如く、お前の親父さんは、熊澤彌太夫に殺されなすつた事は明かに判つて居るのですから、直ぐにもお上に於て同人をお召捕に相成り、旋てお仕置にもならう爾うしたら、それを切めてものゝ長太夫どのへの追善供養として、私は尼法師となつて、亡き夫の跡を弔らはんとそれのみ待居たるに、如何なる理由あつてか敵は安全、されば此の儘になつて居たのでは、何年經ても親父どのゝ怨みの晴る時はありません、親父どのゝ此の怨みを晴さんでは、私は死んでも夫の側へ行く事は出來ません、女なりとも怨みの一念、仇を討れぬとは限りませんし、幸七は增して男の事、是れから武藝に心を入たら、縱對手が不敵の曲者なりとて、亡き親父どのゝ魂が飛移つて、必らず仇を討して下さるに相違ありませんから、切望仇を討て此の世に、迷つて御座る親父さまの怨みを霽して下さい、それには第一御國も家も命も捨る氣になつて、本望を達する氣でなければなりません、改めて言て聞かするのは此の事です」

と云はれて、涙ながらに聽き居たお雪、幸七の二人は勇しく膝を進ませ。

「阿母さんのお詞は能う合點いたしました、實は疾より密かに幸七と相談をいたしそれとなく幸七を仙臺の御城下に登らせ、然るべき屋敷へ奉公をいたさせ、武藝の

稽古をなし又私も、女性相當の武術を覺わたる上は、姉弟心を一にして神佛を祈り爾うして此の本望を達せんと已に約束をいたして居りますが、倘しや阿母さんに打明したら引止められゝ事かと思ひまして、今日までも願はずに居たので御座いますお許しの出ました上は明日にも、幸七を仙臺御城下へ登せたう御座います」

「今姉さんの云はれた如く、私は此の村を逃いたして御城下へ參り、是非とも高名る先生の處へ奉公いたし、爾うして武術を覺へる考へで居りましたが、阿母さんがそれを許してお呉んなさいますなら、斯んな嬉しい事は御座いません」

「さては爾う云ふ考へで居たのでありましたか、それでこそ長太夫どの、娘に伴、さりながら今迂濶な事をして、仇に悟られてはなりませんから、追ひ〳〵と私が話をして聞かす事があります、それまでは何事も此の儘」

と云ひ聞かされて姉弟は、茲に愈よ復讐の大望を起した。

（八）

「おあさどの、在宅かねッ」

と云ひつゝ、入來たは縞の羽織に眼鏡を懸た六十近き老人。

「さア是れは入つしやい、さ切望此方へ」

と云はれて老人、爐の側へと進みて座を占めながら。

「イヤおあさどの、何につけ彼んにつけ、嘸ぞ淋しい事でありませうな」

と、おあさを慰めたのは、此の村の庄屋の孫右衛門なり、おあさは叮嚀に挨拶を述べながら。

「此の間中から、色々と御心配を戴きまして、お禮の申しあげやうも御座いません、御用多の處を、度々お手數をお懸申しまして、寔に恐れ入た次第で御座いました、お察の如く、長太夫が在ませんでは、家の中から外の事まで、何を如何する事も出

來ませんで、何とも困るので御座いますが」

「爾う云ひなさるのも道理だ、無理はないよ、此の家に取ては大切の大黒柱だ、それが不意に那な譯になんなすつたのだもの、實に他事には思はれないよ、爾うしておくめ婆さんも達者かね」

「ハイ、有がたう存じます、達者では居りますが、長太夫の事を聞きましてからと云ふものは、急に氣抜けのいたしてか、茫然いたして恰で子供の樣で御座います、大方餘んまり悄りいたした故で御座いませう」

「ウム爾うか、可哀さうに、イヤ併しそれも道理だ、七十にもなるまで長命して是れから孫子を殖して喜の祝ひでもして貰つてよ、目出度此の世を送られんと云ふ處で、大切の悴が病氣ならまだしもの事、人手に罹つて非業の死を遂たと聽いたら、氣抜けのするのも無理はないぢや」

「何の因果か前を見れば年の往ぬ娘と悴、後を顧ますと七十になる老人、私は今に も、長太夫どの丶側へ往たい氣がいたしますけれども、それも出來ませんので御座

います、それに亡なられました長太夫どのも、今に誰の手に罹つたものとも判然いたしませんのでな、宙に迷つて往處へも往かねで居るだらうと思ひますと」

と、おあさは涙含ながら云へば。

「イヤそれだ、ソ丶其の手に掛た者は、十が十まで那奴……なアおあさどの、嘸ぞ殘念……と思ひなさるのは俺も承知して居る、疾にも搦め捕れて、重きお處刑にもなるべき筈ぢやのに、なアそれには色々と、高い聲では云はれませんが、俺も殘念に思つて居ますよ、切めて其の下手人ばかりも捕はれて、お處刑を受けたら嘸そお前さまや二人の子供も、と陰ながら察して居ますのぢや、處でおあさどの此の程村の衆一同が內々で商議をした上、三人の惣代人が俺の處へ見えたのぢや、爾うして長太夫を、慘酷う殺したのは那奴に相違ない、それをお上で其の儘に打捨おかれては、村の爲めでない、此の後も何んな事を爲るか分らねだに困て、是非とも那奴を……と道理な協議だ、實は俺も云はないのではない是れまでも、度々內訴にも及びましたが何時も、何を証據に、其んな事を云ふのだと反對に証據呼はり、

片腹疼く思へど役目なれば上には抵抗れず、今日までも其の儘にはなつて居れど、村の衆の一同より内訴とあつて見れば、俺がお上へ抵抗のとは違ひますから、目明などには抱らず代官樣へ直訴する氣ちや、さすれば不日、那奴を搦め捕て重き御處刑は疑ひのない處今霎時辛抱して居て呉んなさい」

「ハイ、有がたう存じます、爾う云ふ事にでもなりましたら、長太夫も迷はずに參る處へ參らせませう」

「爾うだ〳〵、イヤ併し今俺の云つた事は、極密々ぢやぞ、必ず他言は無用々々」

「ハイ、承知いたして居ります、決して御心配なされますな」

「是れは意外お邪魔を爲ました、まア何事も因緣事と諦めてな、クヨ〳〵せずに跡を大事にするが肝要と、庄屋の孫右衞門、とつかはと此處を出で去りたり、後を目送り居たるおあさは、獨言に、

「庄屋の孫右衞門さんを始め村の衆一同までが心配をして下さるとは、寔に有がたい事だ、爾うして見れば今度こそ、不敵の曲者も遁れる術はあるまい……が併し猾奸邪智の熊澤彌太夫、此の上にも如何なる手段を盡すか」

と尙ほも疑み居る折柄、奥の間より立出來たれるは老婆のおくめ、

「是れさおあさやお前は此處に何をして居やるのだ、長太夫が歸つて來て佛壇の前に立て居るぞよ、鳥渡往て逢て來なされ」

と、眞顏で云はれておあさは、ほゝと打笑ひながら。

「それはお前さんの迷ひ、亡なられた人が歸つて見らるる筈はない」

とは云つたが、おあさは堪り兼て其の場に溶々と泣伏した。

《九》

老婆は怪訝な面持にて、泣沈むおあさを劬りながら。

「是れはしたりおあさ、お前は何を泣悲しむのですね、遠方へ往て歸らぬ長太夫が今歸つたからと云ふのに、何が其の樣に悲しいのであらうか、私は斯んな嬉しい事

はないと思ひます、是れさ長太夫、おあさは此處に泣て居るから、鳥渡來て顏を見せて遣な、大方お前の歸らぬを悲しく思つて泣のであらう、あゝ是りやア大變だ、如何したら可からう、お雪も幸七も、何處へ徃つて居るのだ、長太夫が歸つて來たのに……快く佛壇にお燈明を點てあげないか折角歸つて來た長太夫は、又出て徃て終ひますぞ」

と愈よ老婆は、取止のなき事を口走るまで逆上したるらしきに、おあさは一層心痛し。

「お婆さん、氣をお鎭めなさい、それはお前さんの氣の迷ひです、お迷ひなさるのも決して御無理は御座いませんが、それでは私が困りますから、切望、何事も因緣と諦めてお迷ひなさるな、お婆さんがお迷ひなさると、長太夫どのが、同樣迷つて成佛をなされません」

と云へば、老婆は始めて氣の注し樣子。

「オヤ夫れぢやア私は、夢を見たのかしら、何だか長太夫が、達者で歸つて來て佛

壇の前に座つた樣に思ひましたから、それをお前に知らせやうと思つたのさ、では矢張私の氣の迷ひであつたのか」

と老婆は潛々と泣く。

「ねゝお婆さん、如何案じたからと云つて、長太夫どのゝ歸る筈はないのですから切望諦めて迷つてお呉んなさるな」

「ハイハイ、モウ諦めました、私まで迷つてお前に心配をかけてはなりませんからお前も諦めて心配をしてお呉れでない」

「ハイ私は疾より諦めて居ります、何事も因緣つくですから、仕方がありません、御佛壇に燈明を點て進ますから、お婆さんは例の如く、鐘を叩いてお念佛を、申してお呉んなさい」

とだますが如く慰めつゝ、心の闇を彌陀本願、照させ給へと燈明を、點じて與へれば老婆は頑是なき小兒の如く。

「ハイハイ」

とばかり、佛壇の前に座りて哀れげに、無常と響く鐘を叩きながら、申す念佛も夢の世や、現に迷ふ亡人の跡弔ふも逆縁の、香の煙りの末消て、歎きの霧も憂や靄に胸も曇りて咽かへる、おあさの心も紊れめる、此の時歸り來たれるお雪は、家内の様子を見つゝ。

「阿母さん、唯今戻りました、而て誰ぞ參りましたか」

「アヽ、先刻庄屋の、孫右衞門どのが見ゑました」

「オヤ爾うで御座いましたか、何ぞ用でッ」

「別段の用でもなかつたが、私供が寂しく暮して居るだらうと思つて、それで心配しながら訪ねて見ゑたのです」

「ちやア外に、お上向の用ではなかつたのですか」

おあさは、村の衆云々の話を爲んとして心注き。

「ねゝ何もお上向の御用などで見ゑたのではありません」

「爾うで御座いましたか、私は善につけ悪いにつけ、庄屋さんなどが來ると、何ですか心配になりますわ」

「それは爾うとねえお雪、お祖母さんは餘り御心配なすつた爲めでもあらうけれど全くお氣が變になりましたよ」

「アラ爾うで御座いますか、此の間中から何ですか、變な事を仰やるから、私は老年の故で耄碌なすつたのだと思つて居りましたが、何んな事をお云ひなさいましたね」

「先刻孫右衞門どのが歸らるゝと直ぐ、奥の間から駈出して來ましてね、長太夫が今歸つて來て、佛壇の前に立て居るから、私にはやく來いと云ふのです、それはお婆さんの氣の迷ひだからと、色々に慰して例の如く、御佛壇に燈明を點て進るからと云つてね、慰めて進たら漸と氣が鎭まつて、那の通りお念佛を申して居ますよ」

「へゝ、爾うで御座いましたか、それでも氣が沈まつて可う御座いましたね」

と不幸の一家は、語るも聽くも秋の虫、唧つ袂に露落て霑りかちであつた。

（十）

小夜更けて奥の一室の内、熊澤彌太夫は正座に火鉢を控へ、前には妻のお辰と惡漢有藏、伊勢松の兩個、大盃で濁酒を酌みながら。

「有藏、爾うして樣子は如何た、庄屋の孫右衞門が全く代官に內訴爲たらしいか如何だ」

と訊ねたるに、有藏進み出で。

「其の邊も殘らず探つて參りやしたが、一体是りやア恁う云ふ次第で御座ねやす、是れまでも庄屋の孫右衞門奴が、度々內訴を爲しやアがつた處が、お上ちやア何を證據に彌太夫が、人殺しの大罪を犯したと云ふのかと、反對にお眼玉を喰されアがつて手も足も出せねねで居やアがつた處、這度は餘計な事に村の奴們が內々で騷ざ出しやアがつたのです、此の村に、彌太夫の如な恐しき男が居たのでは、此の後俺

等とても、安心して枕を高く、寢ちやア居られねねから、是非とも彌太夫を召捕て重き、斬罪の刑に處して貰ひたいと、大勢より願ひ出たので、底で孫右衞門奴も、村の惣代と共に代官に內訴した、すると、代官も道理な次第ぢや、宜しい彌太夫を召捕つて重刑に行ふべしとて、其の內訴を受理られたから、一同安心して引下つたと云ふ事、就ちやア這度は目明や小役人よりもズツと上の方の手で、バツサリ明日にも網が打被さるまいとも云ねねと、確かに聽き探つて參りやした、就ちやア彌太夫旦那、今宵の中にも何とかお考ねなさらなきやアなるめねと目明の權三さんも云ひやした、旦那、モウ此の上は決して由斷は出來やせんぜ」

と云ふに、流石の彌太夫を始め、妻のお辰も悸然して顏見合せたり、爰に至りて邪智獰猛の彌太夫も、最早施すべき術なしとや、腕を組んだ儘小時默然と考へ居た、お辰は疳走つた眼元に、淚を貪みながら膝を進ませ、

「ねねお前さん、是れまでさへも都合善く胡魔化して來たのよ、何んとか考へが附ませんか、如何せ金でする事、田地を過半賣たからとて仕方がありません、なア伊

勢松、お前は如何思ひます」

是れも下手人の片破の伊勢松、手拭で鼻を固摺ながら、

「御内儀の云ひなさる通り、命あつての物種だ、俺等の命は兎も角彌太夫旦那の一命は、身上篩を爲すつたからつて助けなきァならねね、なァ有藏爾うちやねねか」

「内儀の云はるゝ事もお前の云ふものも道理な事だ、したがなァ伊勢松、是れまでは地獄の沙汰も金次第で、安心はして居たが此の上は、黄金の山を積だからと云つても、今までの傳にやア往ねねのだ、然もなけりやァ彌太夫の旦那も、恁う御心配はなさりやア爲ねねのだよ」

「世の中に金ほど尊い物はねねと云ふのに、其の金が用に立ねねと云ふのちや爲様がねねな」

「だからよ旦那も俺等も心配するのだ、ねね彌太夫の旦那、那なに考ねなすつたからと云つて、恁うなつちやァ爲様が御座ねやせんから、御決心なせね」

「俺に決心せよとは、そりやア如何しろと云ふのだ、お上に召捕れて處刑を受けろと云ふのか」

「旦那、お前さんに處刑を受けとする位ねなら、俺も恁う心配はいたしやせんが、其の外に……」

「如何しろと云ふのだ」

「如何と云つて一命にやア代られねねから、タ、高飛するので御座ねやす」

「是れさ有藏、聲が高いぞッ、實は俺もな、高飛するより外に手段はないと、胸の裡で爾う決心を附て居るのだ、なァお辰、おぬしが跡に遺つて困るであらうが、俺も今、首と胴の離れになるも厭だ、と云つて家やお前に離れて他所へ行たくもねねが、是れも犯した罪の報い、仕方がないからなアお辰、それも三年か五年の間だ、其の中餘温が冷切りやア歸つて來らアなア」

「今旦那と、離れなさるのア辛いにやア違ねねが、と云つて恁うして忽々して居てねね旦那」

「爾うだ今夜の中にも、バッサリと來りや此の首と此の胴が離れて終ふのだ、なア

お辰、お前も此の彌太夫の女房ぢやないか、其の心算で長くて五年宅を守つて居て呉れッ」

と、云はれて鬼の女房の夜叉女も、涙に掻暮居たが。

「分りました、仕方がありません、五年でも七年でも餘温の冷却るまで、屹度留守をして居りますから、雲時の處他所へ行てお呉んなさい」

「爾う相談が確つて見ると、風の音にも氣が咎めてならねわから、明日とも云はず今宵の中に……」

と豪膽不敵の彌太夫も、怖氣が附ては一夜も安心がならず、其の夜の中に高飛する事に決した。

《十一》

猛獣も其類を思ふとか、鬼の如き彌太夫も、茲に愈〻高飛するに確つたれば、夜叉の如き女房お辰も其の哀別の情に堪へずや、雲時は涙に咽び居たるが。

「ねわお前さん、お上の方だつて今日までも、放任にしておいたのですもの、正可に今宵の明日のと云ふ譯でもありますまいから、平家の武士が鳥の羽音に驚いて、逃出す樣な事を爲んでも可いぢやありませんか、此の家を一歩踏出せば、何時歸らるゝか知れないのですから、二三日の間緩りと旅の準備をして、爾うして出立を して下さい、私も爾うなれば、此の後何時逢はれますか分りませんから、ねわ有藏さん、二三日の間は可いでせう、私も是れから五年も七年も留守番をするのですもの、彌太夫に色々と話もありまさアね」

「なる程な、それも御夫婦の情だ、爾う思ひなさるのア御無理もねわが、と云つて萬一の事でもあつた日にやアなア伊勢松、如何なものだらうな」

「爾うだ、御内儀の仰やる處もお察し申すが、萬一の事を考へると、明日の事も知れねわのだ、處で恁うしちやア如何だね、是れから俺ら二人で、徹夜に旦那の旅の準備をする事としてな、お二人の寢物語ッてね事もあるから、お二人を翌の朝まで

お寝し申してよ。爾うして明朝御出立なさるッてゐ事にしては、ねゐ彌太夫の旦那
爾う爲すつちやア如何なもので御座ゐやせう」
「爾うだ殘されるお辰も、色々と話のあるのア道理だが、恁うなつて見ると其の話
を、緩り聽いちやア居られねゐや、大切の用は旅先から手紙で爾う云ふとして、明
日の朝未明に出立すると爲やう、ちやア俺は一寢眠するから、有藏と伊勢松は徹夜
に準備をして呉れちやア、お辰、一寢眠するから奥へ夜具を敷けッ」
「ちやア如何しても、明日の朝になさるのですか」
「未練な事を云ふなよ、是れつ限り歸らないと云ふのじやあるまいし、お前にも似
合ねゐちやないか」
「ちやア仕方がありませんから、爾いたしませう」
「處で旦那は、是れから何處の國へお出なさるお心算で御座ゐやす、都合に因ちや
ア俺共も、お跡を行やうな事があるめゐものでも御座ゐやせんから」
「那國と云つて俺も目的のある譯ぢやアないのだ、が、まア兎に角四國へ往て、金

比羅神社へ參詣をする心算だ、それから樣子に據ては九州へも廻る考へだ、爾うして歸路は大和めぐりをして、紀州の高野山へも參詣し、結局は江戸に足を趾める考へだ」
「なる程、是りやア思ひ附で御座ゐやす、讃岐の金比羅參りから四國めぐり、高野山から京大阪を見物し、爾うして江戸に霎時足を趾なさる……結構な旅で御座ゐやすな」
「なんなら俺もお供が爲てゐもので御座ゐやすな」
「それも可からうが、お前ら二人共居なくなつちやア家のお辰が困るからな、當分の處は跡を二人に憑んで往のだから、其の心算で農業の事を爲つて呉れ、江戸へ來て足を駐りやア屹度二人を呼んで見物も爲せるし、又、都合によればお辰も呼ぶよいと思ふのだ、何の道、此の東山の土地さへ放れて仕舞ば、何も怖い事はないのだ
したがア有藏、俺は是れから仙臺の城下へ往て、霎時逗留をして家の樣子を聽きた城下へ往たら沙汰をするから、留守になつた跡の樣子も、上向の沙汰を索つて聽か

せて呉れ、其の様子次第で俺は四國までも高飛する考へで居るから、なアお辰、お前も其の心算で俺の便を待て其の時は、城下まで是非伊勢松を上仙て呉れよ」

「ハイ可う御座います、ちやア御城下へお着になりましたら、直ぐとお便を爲すつてお呉んなさいまし」

「承知した」

と、其の高飛の往先のあらましを、語告げて彌太夫は一睡とする間もなく、曉の鳥の聲に夢を驚かされて床を放れ、旋て旅裝も充分に整へ。

「ちやアお辰、跡は何分にも憑むだ俺の事を案じて病氣でも爲ないやうにしてな」

「あなたも家の事を御心配なさらずに、旅をお厭なすつて」

「有藏、伊勢松にも跡を憑みますぞ」

「ちやア旦那、御機嫌よく」

「ちやア三人も無事で居て呉れ」

と別を告て彌太夫は、住馴し我家を跡に見ながら立去つた。

《十二》

果して其の三日目であつた、目附役の指圖によつて數名の捕手は、中川村に出張して不意に彌太夫が家の前後を取圍み。

「主個彌太夫、御用だ」

と踏入たるに、何ぞ計らん彌太夫の、姿も影も見ねざるに捕手は、一同顔見合せて是は什麼いかにと、暫時呆氣に取れ居たるが、さては風を喰つて快くも逃走したるものか、手抜つた事をしてけりと、握り詰たる拳を空しく、家内を窺ひ廻るのみなり中にも重立たる捕手の役人が進出て、女房のお辰を其の場に控へさせ。

「其の方は、彌太夫の妻であるか」

「ハイ、彌太夫の妻辰と申すもので御座います」

「ウムさ樣か、而て彌太夫は疇れへ參つた、大方風を喰て身を匿したのであらうが

那處に匿れて居るか、さ申立い」

「私は妻で御座いますが、彌太夫が犯した科のあるやなしやは存じません、亦彌太夫は七八日前弗と家を出ました限り、未だに戻つて見ませぬ、私共も如何いたした事かと存じましてね、心配の餘り八方へ人を出して、在處を索して居りますので御座いますが、頓と分りませんので御座いまして彌太夫が、何ぞ犯した科でも御座いませうか」

と、そら〳〵しく捕手に向つて訊ねた。

「其の方は全く、それを知らぬと申すのか」

「ハイ、何事も毛頭存じません」

「知らぬとあれば語り聽かするが、其の方の夫彌太夫は、同じ中川村の百姓長太夫を慘酷にも研鎌で殺害いたした事訴へに因て明白いたしたのぢや、就ては、召捕の上重き處刑に行はるゝ筈であつたが、大方はそれを悟つて逐電いたしたのであらう」

「仰せられます如く、夫彌太夫は人殺しの大罪あるとは存じませんが無斷で家出をいたしまして、七八日も歸宅いたさぬ處を見まするとは、全く人殺しを……其の邊の處は、妻で御座いましても一向に存しません」

「其の方眞實存せんとあればいたし方もないが、近所へ匿つてゝもあつて、後日露顯に及べば其方とても同罪ぢやぞ」

「如何いたしましてさやうな事は毛頭御座いません」

と云ふに、捕手一同も渠は愈よ、長太夫を殺害したる科の免れ難きを悟りて、逐電したるものと認め、上向の事は此の儘沙汰休みとはなりたり、然るに、此の事忽ち村内の評判となり。

「如何だ見さつしやい、熊澤の彌太夫はいよ〳〵、長太夫ごんを殺した科と判然たアだでな、此の程捕方の衆が大勢向つたアだ、すると、那奴も曲者、遂と風をオツ喰つて逐電したアだ、何と太ゝ野郎ぢやあんめえか」

「お上を恐れず、那げな人殺しの大罪を犯すたア、憎い奴もあればあるもんだ、お

上でも快くお召捕になつて、首でもチヨン斬て下されア可いがと、俺はアを初め、村の衆一同も心の裡でお祈り申して居たゝ、處がほつてねねお召捕になんねねだ、俺はア苦々しく思つて居たべね、すると、村の衆一同が、承知ねと云ふのでお上さまでも、此の儘ぢやア安穩に終めねと、いよ〳〵お召捕と云ふ事になつたゝから、野郎は逐電したアだ、何の道此の村に那げな野郎の居ねねのア村の喜びだつてな俺の隣りぢやア小豆飯を炊で祝つたアだ、したが氣の毒なは、長太夫親子だ、なア」

「人間の慾つてねものは、怖かねねものだな、彌太夫の野郎も、田畑を人一倍所有居る上にも、慾を貪ねたばかりで長太夫をオッ殺したアだ、其んげねな罰當りな事を演た報い、這度ア奴が田畑も女房も打据て逐電するたア何事だなア、俺の樣に無慾で、恁うして居れア却つて安樂なものだ、アハ、、、」

と二人の百姓は、誰はゝからず大聲しての噂さ話、折柄來蒐りしお雪。

「オーお雪さんか、何處へ往て來しやつしやつたね」

「ハイ、少し購物に往て今歸る處で御座います、お前さん方も今お歸りかね」

「今日は東山まで用がありましてね、二人で出懸やした歸りさ」

「時にお雪さん、野郎は遂と逐電爲やアがつたゝよ」

「へね、野郎が逐電……誰がですねね」

「お前も悟りが鈍いな、彌太夫の野郎がだよ」

「へね、ちやア那の彌太夫が……」

「お前さまの處の親父ごの〻事が、いよ〳〵露顯と云ふ理由になつたアだからよ」

「お召捕になれア首を、打刎られるだからな、恐ろしくなつて逐電したゝ」

と始めて聽きしお雪は「さては彌太夫いよ〳〵逐電せしか、汝彌太夫那國へ逐電爲樣とも、骨髓に徹する恨みを、霽さでおくべきか」

と、想ふ胸の裡を色にも出さず、二人の百姓們に立別れて、急ぎ我家へ立戻つた。

（十三）

「阿母さん、私は今歸り途に、妙な事を聽かされて來ましたよ」

「オヤ爾うかね、して何な事です、何ぞ變つた事ですか」

「外でもありませんがね、村の衆の話に依れば、彌太夫は那處へか逐電したと云ふ事で御座いますよ」

「其の事なら私も鳥渡聽きましたが、此の間庄屋の孫右衞門さんが話された通り、愈よお召捕が向ふ事になつたので、快くも逐電したのかも知れないね、凡夫旺んにして神祟りなしとか云ひますが、那の彌太夫程惡運の強い者はないよ、村の衆一同より憎れ、愈よお上のお召捕になると云ふ處を、亦も運強くお召捕の手を漏れて逐電するなんて、何處まで運の強い男でせうね」

「ねゝ阿母さん、彌太夫の運強いのでもありませうが、是りサア矢張怨んで御座る阿父さんが、何處までも私と幸七に彌太夫を討たせて、思ひの儘に恨みを霽させて下さるためかと思ひます」

「大方長太夫どのが、草葉の蔭から爾う護つてお在なさるのでせう、それに付けても知らるゝ通り、祖母さんは那通りの御病人でもありますし、今如何思つたとて仕樣がありませんが、お前と幸七はモウ田畑などへ出て、仕事を爲んでも可う御座んすから、東山へ往て奉公でもなさいと何かは知らず、おあさが心ありげの詞をお雪はそれと悟つてか。

「阿母さん、今阿母さん一人に、病人の祖母さんをお預けして遠方へ參りますのは寔に心配にもなりますが、兎に角幸七を連て仙臺の御城下へ出て、御奉公をいたさせて下さい」

「それも可いでせうが、御城下へ出るのはまだ尚早ですから、されば來年の事になさい、爾うして兎に角に讐人の樣子を、充分偵察上の事になさい、何處に何人が居て、讐人の方へ內通する者がないとも云はれませんから、何處が何處までも、親が

亡くなつて百姓も出來ず、是非なく奉公に出ると、世間へ見なくせてはなりませんから、必ず輕操な事をしてはなりませんぞ」

と敎へられて、お雪は其心持で居れど、弟幸七は何を云つても聞入ず、既に此の程より東山に住む泉田家の臣、三好賢三と云ふ劍術の先生の許へ、遙々と密かに通ひて稽古を始めた、母のおあさもれそと知りて心の內に喜び、其以來は農業の事は一切手傳せず、日々武藝の稽古にのみ通はせ居たり、さればお雪も、日增に幸七の武藝が發達するを見て、大に羨ましく思ひ、人なきを幸ひ幸七に向ひ。

「私には分らないが、お前は日增に劍術も上手におなりのやうですが、私も如何かして、先生のお屋敷の樣な處へ御奉公をして、人の稽古をするのを見るばかりでも見たいと思ひますが今はそれも出來ませんから、お前がお敎はつた處を內々で、私にも敎へてお呉れでないか」

「姉さん、俺は敎へて進る事なんざア出來ませんが、竹刀を持てお面……お小手……を演て居る中には、漸々に覺ねますよ、家へ歸つて來ては、誰も相手がなくて稽古は出來ませんが、姉さんが稽古をするなら明日、先生の處より竹刀を持て來ますから、夜間でも稽古を爲さい」

「ちやア切望竹刀を持て來てお呉んなさい、百姓とは云へ警人は豪膽不敵の健者お前や女の手では却々負る人間ではないのですから、私も女ながら武藝を奬勵で、本望を遂げなければなりません、それに就ては何時までも、此の村に恁うして居たのでは不可ませんから、來年になつたらお前と二人で、仙臺の御城下に登り、充分武藝を勵んで本望を達するのです」

「姉さん、それは私にも分つて居ます、ちやア明日は竹刀を持て來て進ますから、屹度稽古をなさいよ」

とて其の翌日、二本の竹刀を擔ぎ來たるにお雪も喜び、それよりは夜半人の寢靜まるを待て姉弟は、月の明りに廣庭へと立出て、雪は手拭にて鉢卷し、襷を十文字に綾りて、竹刀を持て中段に身構へれば、弟の幸七も同じやうに竹刀を執て一心不亂擊つ擊れつ一上一下、お面……お小手……と每夜の稽古に、師範の人のあるに

あらねど、一心は爭はれず、お雪は身構へから竹刀を打込手際の輕妙、其の孝心に感應して神や歎へけん、姉弟の竹刀は却々に鋭くして輕蔑れず。

（十四）

東山の三好賢三先生は、稽古着の儘火鉢の側に座を占めて、二三の門弟の立合を檢し居たるが、心の裡に。

「先ごろ中より、中川村の百姓の小悴が遙々と此處まで稽古に來るが、如何も不思議な青年だな、百姓の小悴の癖に劍道の稽古に來るとは、何か仔細のある者かも知れんが、一体何者の悴であらうか、殊に感心なのは非常の熱心、遠方の處風雨の日も厭はずに來るが、如何も妙な小倅だ」

と、頻りに嘆賞しゐる折柄、例の如く來たは幸七だ、幸七は先生の前に來て恭しく一禮を述た上、直ぐと衣物を脱して面小手を着、道場に出て他の門人們に向ひ。

「切望、お願ひ申します」

「ウム、お前は幸七か、昨今は大分上手になつたぞ、ちやア身們が、一番相手になつて進せやう、さ來い」

一有がたう存じます、切望お願ひ申しあげます」

と、甲乙の差別なく對手を需めて立合、身は綿の如くヘト〳〵になるまで稽古を爲し貰ひ、總身汗となりて面を脱し、霎時の間休憩し居た、それと見るや賢三先生。

「幸七此處へ」

と呼ばれて幸七。

「ハイ」

と先生の前に手を突く。

「大分近ごろは旨くなつたな、今日の竹刀の打込などは却々好い處があるぞ、それと云ふのも熱心であるから上達するのぢや、物事は獨り劍道には限らない、何事で

も熱心でなければならんからまア、折角精を出せ」

「ハイ有がたう御座います、先生さまを始め、皆さま方の御丹誠を戴きまして、剣道を心得ますかと存じますして、御禮の申しあげ様も御座いません、此の上にも精を出して稽古をいたしまするで御座います」

「ウム、爾うしてお前は中川村の百姓の悴だとか申したが、親父は何と申すな」

「ハイ、親父は御座いません」

「ウム、親父はない……、而て家には誰が居るのぢや」

「阿母さんと、一人の姉が御座います」

「ウム爾うか、而てお前は百姓の悴であるのに、如何云ふ考へで剣道を修業いたさうと云ふのだ、百姓に武士道は無用ではないか、剣道の稽古に精を出すよりも、農業に精を出した方が可いではないか」

「ハイ、如何にも先生さまの仰やる事は、御道理さまで御座りますが、私は百姓の悴で御座いまして、此の武藝が好で御座ります、農業が大嫌ひで御座いますゆゑに、農業が大嫌ひで御座いますゆゑに、農業が大嫌ひで御座いますゆゑに

姓と申しましても、武藝の心得が御座いませんと、思はざる災難を受ける事が御座います、世間のお武家さまなどは、土百姓と云へば手に鋤鍬を執るより外、何事も知らぬ者で御座いますから、無罪の百姓に對つて、無法の御成敗などを爲さる事が間々あるので御座います、斯る時は百姓なりとて武藝の心得が御座いますと、決して犬死はいたしません、それ故に手前は武藝を心得たいと存じまして願ふので御座います、現に手前の父長太夫と申す者、昨年の秋人に殺害いたされまして、不慮の最期を遂られまして御座いますが、是れも必竟武藝の心得が御座いません爲めかと存じます」

「是りや幸七、さやうな事を遠慮なく他人の前で申しては不可、それでお前の目的が明瞭いたした、宜しいから明日より、一層精を出して稽古をいたすが可いぞ」

と道かに、三好先生は頷かれた。

《十五》

お雪幸七の姉弟は、益す武藝に心を入て、夜と云はず晝と云はず、一心不乱に勵むにぞ、村の甲乙は忽ち噂を立て、笑ふもあれば褒るもある。

「オイ芋右衞門、お前は聞いたか、去年何者かに慘酷う切れて殺された長太夫の娘と悴だ、日頃は野等へも出ずにな、頻りと撃劍々々を演て居るつてねこんたが、あれやア大方親の讐を討に出懸る準備だんべいちふ話だが、豪氣事を考ねるもんぢやねねか、親の敵討なんちふ事は、物語や講釋で聽いた事アあるが、現在に觀るつちふのア初めてだ、なんぼう面白ね事だんべいかはア」

「專ばら爾うだつちふ評判だが、而て仇と覘はれて居る那彌太夫は、那國へ逐電しをるのだんべいか、今時復讐なんちふ事は珍しいごんたなア」

「何にしろ彌太夫の處にも、田畑も有れア女房のお辰も居るもんたからな、遠方へ

往て居る譯でもあんめねよ」

と麥作、芋右衞門們が誰憚からぬ噂さ話を、木蔭ながらに偸聞居たる例の有藏は、麥作芋右の二人を遣過して忍び足に續き、尙ほも談話を聽きつゝ歸り來た、此の時伊勢松も前後して歸宅したる樣子なりしが。

「有藏今歸つたのか、俺も唯た今歸つたばかりだ」

「ウム爾うか、而て內儀は家に居るのか」

「何か納屋で仕事をして居るよ」

「ちやアな、俺ア少し話があるから、此方へ來て呉んなせねつて呼んで來て呉んねね、爾うしてお前にも相談があるのだ」

「爾うか、何だか知らねねが、ちやア呼んで來やう」

と、旋て伊勢松と共にお辰は一室の內へと入來たり。

「有藏さんも歸つて來たね、爾うして相談があると云ふのは何だね、急な事でもあるのかね」

「外ちやアないがね、此の間中も話をした通り、長太夫處のお雪と幸七の二人は、愈よ復讐に出ると云ふ噂さで御座ねやすから御內儀油斷をしちやア居られアしませんせ、今も今とて村の奴們の噂さを聽いて參りやしたが、如何だ伊勢松、手前も其んな話を聽かねねか」

「何の聽かねね處か、昨今は村中の大評判だなア、御內儀、お前さんに遠慮をして何にも云ふ人は御座ねやせんが專らの取沙汰で、御座ねやすから、何とかお考ねを爲すつてお呉んなせね」

と云はれて、夜叉のお辰も當惑顏、暫時は詞もなく考へ居たが。

「それぢやア愈よ、那の姉弟が親の敵を……」

「お前さまは知んなさるめねが、弟の幸七は、東山の三好賢三先生の處へ往つて每日劍術の稽古、歸つて來ると姉のお雪も幸七を對手に、夜晝なしのヤットウ騷ぎ、俺らも油斷は出來ねねが、而て旦那は何處に足を趾めて居なさる事か、少しも快く知らせて下されア可うがすな」

「それで私も心配するのだよ、那姉弟が愈よ敵討に出るとなれア、一日も快く知らせて、油斷を爲せない樣にして進なくつちやアなりません」

「爾うで御座ゐやすとも、城下あたりに辻かりして居て、姉弟の奴們のために、やみ〳〵と討れちやア是れまで、御內儀や俺ら共まで、心配をしやした甲斐が御座ゐやせんからな」

「爾うのくらゐないども、だが彌太夫も、在處を報らせた！は思つて居るに相違あるまいが、鵜の目鷹の目、書狀を憑む者もないので、それで遣さないのであらうよ」

「そりやア爾うで御座ゐやすとも、おやア恁う爲やせうか、俺やア是れから城下へ登つて、爾うして旦那の在處を索し、此のお話をいたす事に爲やせうか」

「それも可からうなア御內儀、爾うして有藏に往て貰つちやア如何なもので御座ゐやせう」

「有藏さんが往て呉れたにしても、彌太夫の在處が不明では、矢張雲を摑むやうなもの、御城下は東山などゝ違つて廣い處ですもの、却々探す當られるものぢやないよ、今日にも又、書狀でも持て來て呉れる人がないとも限らないから、まア、モウ少し待て見てお呉れ」

「何にしろ氣の揉る事だな」

と、三人は頻りに氣を揉み居るも笑止。

（十六）

お辰有藏等は、一日も早く彌太夫の在處を知らんものと待居たるが、或日、在方を行商する小間物屋と見ゆる、一人の男が入來た。

「モシ、少々物をお聞き申したう御座います」

「ハイ、何ぞ御用で御座いますか」

「イヤ別の用では御座いませんが、旅の小間物屋で御座います、格別お安くいたし

て差進ますから、何品なりとお購めを願ひたう御座います」

「アラ小間物屋さんかね、私は又、何か用のある人かと思つたのに、まア今日は別に購物もなかつたね、序があつたら復來てお呉んなさい」

「爾うでも御座いませうが、私は城下から來た者で御座いますから、何なら御覽にばかりもなつては如何で御座います」

と小間物屋は、斷られながらも荷を卸して、其の場に陳列はじめた、お辰は仙臺の城下と云はれて心注き。

「オヤ、小間物屋さんは、ぢやア仙臺の御城下なの、大變遠方から來たのだね、それでは何か購つて進ませう」

「へゝ切望、お需め下さい色々品は御座います、何、此の邊處では御座いません、人首の方や氣仙沼邊までも參ります」

「爾うですか、而して仙臺は何の邊ですね」

「ハイ、仙臺は二日町で御座います」

「爾うですか、私は一度も御城下へ出た事はありませんが」

とお辰は取廣げし小間物を觀て居たるが、小間物屋は頻りと家内の樣子を見廻しつゝ。

「御内儀、妙な事をお聞き申しますが、倘しや此方は、彌太夫さんと仰やる人のお宅では御座いませんか」

「ハイ、彌太夫の留守宅ですが、倘しお前さんは何か……」

「御内儀、別に遠慮する人は居ませんか」

「ハイ、誰も居ませんがお前さんは、彌太夫から何ぞ懲まれなすつたものでも……」

「ハイ、實はお書狀を憑まれて參りましたが、極密々で御内儀へ手渡して呉れと、ハイ、それも旦那から直接に憑まれましたのちやア御座いません、少々懇意にいたして居りますものから……」

「オヤ爾うで御座いましたか、まア、それは〳〵何とも有がたう存じました」

「お憑みを受けましたのは、此のお書狀で御座います」
と云ひつゝ、小間物荷の底の方に仕舞おきし一封の書狀を取出して。
「是れで御座います」
と手渡したり。
「爾うで御座いますか、什麽もく是れは有がたう存じました、而て彌太夫は、變る事は御座いますまいね」
「私がお目に蒐つたのぢやア御座いませんから、其の邊は存じませんが、大方御無事で御座いませう、恁うしてお書狀をお遣しなさる位ゐで御座いますから」
「實は色々と用事が御座いますのでね、此の書狀の參るのを待て居たので御座いました」
小間物屋は書狀を渡すと、手早く荷物を仕舞込んで歸り準備をする。
「ゐゝ小間物屋さん、誰も遠慮する者も何もありませんから、今夜は手前們へお泊んなすつてね、切望緩りとなすつてお在なさい」

「ハイ、有がたう存じますが、それぢやア却つて、御迷惑をお爲せ申しますから、御用が終ばお暇をいたします」
と小間物屋は強て立去んとするに、お辰も是非なく、二歩金一個を紙に包んで。
「小間物屋さん、是れは少些ばかりですが、草鞋錢にしてお呉んなさい」
「イヤ、それはお控へ下さい」
「ゐゝホンの草鞋錢で御座いますから、持つて往つてお呉んなさい失禮ですが」
「ちやア御遠慮なく、頂戴いたして參ります」
と、孰れ秘密の使ひ、双方より禮金を貰ひ受けて小間物屋は立去りた、跡にお辰は前後を見廻しながら開封して讀下せば、住馴し我家を跡に見て、目的もなき旅に出たる心細き事より、諸所をさすらひて仙臺の城下に足を駐め居るまでの事を認め、目下は、聊かの便を得て、原の町の玄米問屋、名取屋善助方に客分として逗留し居れば安心し呉れ云々とある、お辰は大に打歡び、有藏、伊勢松にも書狀の赴きを語聞かせた上、長太夫が娘のお雪と、悴幸七の姉弟がいよ〳〵敵討に出る云々を、一

日も快く報せんものと密かに協議を凝し居た。

《十七》

「同じ様な協議をして居たつて、爲様が御座ゐやせんから寧そ、俺が御城下まで登る事にいたしやせう」

と有藏は云ひ出した、雲時考へ居たるお辰は、有藏に向ひ。

「爾うして貰へば譯はありませんがね、實ア彌太夫にモウ一度私が逢たいと思ふので、それで如何かして、御城下さで私が登りたいと考へるのだよ、女だつて二十里や、二十五里位の里程は徃れない事はないから、爾う出來る事なら伊勢松を連て徃て逢て來たいと思ふのです」

「ウムなる程、爾う思ひなさるのア御道理で御座ゐやすが、若し爾うなさると、此處でお前さまが旅へ立たと云ふ事を村の者に解れア直ぐと、威附れて仕舞かと俺は思ひます」

「なる程それも考へものだな、御内儀が旅へでも出りやア直ぐ、是れは大方彌太夫旦那の匿れて居なさる處へ、徃たものに違ひねとなれアだ、云はゝ仇を覗ふ先方に旦那の在處を知らせるも同じ事になる道理だ折柄爾う思ひなさるのをお廢なせねと申すのは、云ひ憎い事ぢやア御座ゐやすが、御内儀のお出なさる事ア見合せなつた方が可う御座ゐやせう」

「御夫婦の仲だ、お逢なさりてねのア山々さ、併し後々の爲めを考へるとなア伊勢松」

「なる程、二人の云はるゝ事は道理ですちやア、私の徃ことは廢ませう爾うして、誰か二人の中一人、今日の中に立て上仙してお呉れ」

「協議が確れア今直ぐでも可う御座ゐやすから、俺が參りやせう」

「イヤ俺の方にもな、旦那に内々で咄があるから、這とア俺が徃て來る事に爲やしよ」

「ちやア悟う爲やう、寧その事閾引にして出懸る事に爲やう、それが可いちやねわか」

「それも可からうちやア手前閾を作れねわねな」

「好し」

と伊勢松は、小撚を捻つて閾を拵へて有藏に引せたり。

「長ねのが當りだ、好しか」

「ウム、長ねのが徃のだな、ソレ見ろッ俺の方が長ねのだ」

「是りやア爲損た、仕方がねねやお前が徃て來ねわ」

「ちやア御内儀、閾當りでいよ〳〵、俺が參りやすから切望、爾う御承知なすつてお書狀をお認なせわ、俺が徃て旦那にお目に蒐れア、詳しいお話はいたしやすけれども、御内儀は御内儀だけのお心持を記てお呉んなせわ」

「ちやアいよ〳〵有藏が徃のですか、ちやア私は書狀を認ますから、切望持て徃てお呉れ、それから着物を二三枚遣たいが、荷になるかも知れないけれど、それも切望持て徃てお前から彌太夫に話を聞かせてね、私は無事で悟うして居ると云ふ事も」

「承知いたしやした」

と是れから有藏は、お辰の書狀と金子を胴卷の中に楚りと包み、彌太夫に渡すべき二三枚の衣類を荷造して其日の中に東山中川村を出立して仙臺の城下へと向つた、斯くて有藏は、中二夜を泊りて三日目の黄昏ころ仙臺の城下へと入込み、原の町は東の町端れと聞居たれば、町行人に路を尋ねながら、一泊し、翌朝宿を出立して原の町に至り、豫て聞き來たれる玄米問屋、名取屋善助方の店頭を窺ひ撿たるに、果して彌太夫は、同店の番頭然として立働き居るにぞ、有藏大に打喜び、店頭に進みて菅笠を脫なながら。

「眞平御免なせわ、彌太夫の旦那、有藏で御座わやす」

それと見るや彌太夫は。

「有藏かッ」

と意外に思ひながら、居合す人々に心を注ぎつゝ。

「ウム、まア可く尋ねて來て呉れた、兎に角足を洗つて揚つて呉れ」

と云はれて有藏、裏手の井戸に至りて足を洗ひ、此方へと云はるゝ儘、男們の部屋と定めある店二階へと通つた。

偖て他に人も居らぬ處なれば、二個は互に一別以來の狀況を、語りもし聞きもしつゝ有藏は、胴卷の中より取出してお辰の渡せる金子と書狀を彌太夫に渡した。

《十八》

彌太夫は、妻のお辰より送りし書狀を讀畢りて、見る〳〵顏色を變じたるが、是は姉弟が、愈よ讐討に出る事となりたれば、努油斷をしてはならぬ云々とあるに、不敵の彌太夫も、偖は爾うかと悸然したれど、されど豪膽の曲者、故意と微々笑ながら。

「何、此の書狀で見ると、長太夫の處の姉弟が、親の讐を討に出ると決心して、昨今武術の稽古最中だとしてあるが、洒落臭い二人の餓鬼們、有藏心配するな、今にも仇討に來やアがつたら、見事返り討にして呉れるから見物居ろ、それをお辰は心配して居るらしいが、イヤそれも道理だ、併し決して心配するなと云つて呉れ」

「實ア俺の參りやしたのも、矢張其爲めなんで御座ねやす、先頃中から那小僧の幸七奴が、東山の先生三好賢三さんの處へ日々通ひましてな、又家ぢやアお雪の阿魔が、女の癖に晝も夜も後鉢卷の襷掛け、竹刀を執て是れも稽古の最中、孰れ近々の中に村を出て江戸はおろか、長崎から松前の隅々までも旦那の在處を尋ね索めて、仇を討うと云ふので御座いやすから、何時が何時までも油斷は出來ねのので御座ねやすせ、尤も腕に覺のある旦那、立向つて勝負を決しりやア多寡が知れた兩個の餓鬼們、返り討に爲さるのア手もねね話だが、旦那が倘し姉弟が仇討に出た事を知らずにお在なすつて、萬一不意討を喰た日にやア爲樣が御座ねやせんから、それで實ア一日も快く、此の事をお知らせいたさうと御內儀と、俺們が心配いたして居や

すと、恰ど旦那のお書狀を持て小間物屋が參りやしたので、取敢へず俺が上仙いたしたので御座ゐやす」

「そりやア寔に、有がたい次第であつたよ、お前の云はるゝ如く、如何此の俺だと云つても、二人に不意討を喰た日にやア堪るものではないよ、それを俺の方で承知して居ればだ、一寸の間だつて油斷は爲ねゐから、不意討に遭やうな事は全くないよ、何にしろ此處に怙うしちやア居られねへな、幸ひにお辰から金子を送つて呉れたから、是れから一先江戸へ赴き、爾うして初めの考へ通り、四國の金比羅詣に往事にする、切望お辰にも其譯を話て呉れ、しだかお前らも共に、長太夫下手人の片破だから、必ず油斷をするなよ」

「承知いたしやした、決して油斷はいたしやせん、おやア旦那は、四國へ高飛なせゐますな、一日も快くそれが可う御座ゐやす、底でお家の事ア俺と伊勢とで、御內儀を補佐て農業の事や、何も彼も一切いたして居りやすから、御心配なさらずに、四國へ往てお仕舞なせゐ」

「何分にも跡の事ア お前と、伊勢松に賴んで置から切望お辰の事もな、可いか」

「畏まりました、御心配なせゐますな、ちやア旦那、長ゐお話を爲て居ちやア家の人の前も御座ゐやすから、是れでお別れをいたしやせう」

「久しぶりだから、何處で一杯飮たいが、人前を憚るからな有藏、お前一人で町の方へ出て飮て呉んねゐ」

と二人は立別れんとしたが、彌太夫は弗と何事か思ひ出して。

「オイ有藏、寧その事に怙うしたら如何なものだな、此の俺を讐と覗ふ以上は、次にやアお前等も、第二の仇と向はれるにやア違ねゐのだ、處で兎に角、那二人が此の世の中に居やアがる間は、俺と手前方二人は枕を高く、安心して寢る事ア出來ねゐと云ふものだ、就ちやアな那奴、二人仇討に村を出たを幸ひ、手前と伊勢松の兩人で、姉弟の跡を追ひ蒐けて闇討……なア、爾うさへして終へば、俺もお前ちも安心なもの、若しそれが首尾可くお前ら二人で爲遂りやア有藏、俺の處の田畑は云ふまでもなく、身上を半分お前ら二人に分配で與るが如何だ、決行る量見はない

か」

「ウムなる程、此奴ア面白ねや、那餓鬼共が二人で村を出で……ウムなる程、旦那是りやア屹度決行ます、伊勢松と兩人跡を覗つて闇討たア旨ね考ねだ、可うがす御安なせね」

と嘯きて、此處に兩漢は立別れた。

（十九）

話頭一轉お雪幸七の姉弟は、親の仇を討たさの一心に、夜も晝も姉弟で竹刀を撃合せて稽古を勵み居たが、不倶戴天の當の仇なる彌太夫は、既に他國へ出奔したる上は、何時までも恁うして村には居られずと姉弟は決心し、兎にも角にも仙臺の城下に出て武家に奉公し、武藝を鍛練したる後、草を分ても仇彌太夫の在處を探して本望を遂んものと、密かに幸七は姉のお雪を人なき處へ呼び寄せた。

「姉さん、相談と云ふのは別の事でもありませんが、私も何時までも恁うして居たのでは仕方がありませんから、私は姉さんと二人で、御城下へ往て奉公をいたさうと思ひます、就ては三好先生に願つて、御城下の去御藩士の處へお書狀を戴く事にいたしました、ねね姉さん、モウ阿母さんも何とも仰やる筈もありますまいから二人で阿母さんに願つて、姉さんと一緒に御城下へ登りたく思ます、が姉さんは如何思ひますか」

と云はれて、一日も快くと願ひ居るお雪は、一も二もなく同意した。

「三好先生が御書狀を下さいますね、それは何よりの幸ひですが、爾うして御城下の其お屋敷は何でせうね」

「能くはお聞き申しませんが、矢張劍術と槍と兩方の先生だとか云ふお話でありました」

「へゝ爾うかね、そりやア大層都合が可いぢやありませんか、私は女の事ですから何な處へ御奉公爲やうとも御主人はありますまい、ぢやア是れから阿母さんに、其理由

をお話いたして願ひませう」

と姉弟は、是れより母のおあさの前に來たりて兩手を突き。

「阿母さん、改ためて申すまでも御座いませんが、當の讐の彌太夫は、既に他國へ出奔いたしましたに就ては、私儕姉弟、豫ての望み通り、如何なる辛苦艱難をいたしますとも、毫も厭ふ事は御座いませんから、草を分ても彌太夫を尋ね出して、本望を達し爾うして、此の世にお迷ひなさる阿父さんの恨みを霽したう御座います、殊に幸ひなるは、東山の三好先生より、御城下の去る御藩士へ御書狀を下さる筈なさうで御座いますから、明日にも私と幸七と倶に、出立いたしたう御座います、切望それを御承知なすつて、お許し下さる樣お願ひ申します」

と云はれて母のおあさは、既に自分よりも勵ましたる程の事なれども、さて今更の如く、姉弟を仇討に出立せしむるに忍び難てや、雫時は闇涙に咽びて詞もない、良ありておあさは涙を拭ひ。

「如何にも道理です、それでは承知しましたから、善日を選んで旅立してお呉んな

さい、それに就ても入要の物はお金ですが、お金と云つては家には少しもありませんから、田地を賣て拵へて進ます、其間待て居て下さい」

「イヤ阿母さん、それは必ず御心配下さいますな、此の家を一步踏出せば、其本望を遂て目出度家へ歸るまでは、幾年月とも分らぬ旅路、お金など所持居りましては長の旅は出來ません、旅する者には却つて金が禍となるとか申しますから、決して御心配下さいますな」

「今姉さんの云はれました如く、私は金などは一文も要ません、本望を達するまでは、蒼天を笠に被つて何處が何處までも、旅をするのでありますから、乞食になつて人の軒下に宿り、順禮になつて門口に一文二文の御放捨を賴むは愚な事、山の谷底野の草の中、獸類と倶に起臥するも厭はぬ覺悟、阿母さん、私儕が旅に出たからと云つても、必ず〳〵心配は爲てお呉んなさるな」

「それを御心配してお呉んなさると、旅に出た私儕が却つて、後毛を曳る樣な氣がいたしますから、何事も私儕姉弟で、本望を遂て歸るまでは」

「武運長久を神さまへ祈つて下さい」

「其外にお願ひは何にも御座いません」

「それはお前們とても同樣、一歩踏出したら、私や祖母さんの事を案じて、精神を鈍る樣な事がありましては、決して本望は遂られませんから、必ず家の事は案じてはなりません、此の間も云つて聞かせた通り、家も母も祖母さんも、何にもないものと思つて唯、一心に神樣を御信心して本望を遂てお呉んなさい」

と云ひ聞かされて姉弟は、愈よ旅立の準備に取かゝつたり。

《二十》

お雪は祖母と母を跡に殘して、何時歸るとも分らぬ旅に出るに就ても、親の亡き後も何彼と親切に世話を受け居た庄屋の孫右衞門、其外二三の村の人に告別を爲さんと考へ。

「ねゝ阿母さん、私と幸七と同時に此の村を立去つたら、村の人々は變に思ふで御座いませうが、其處は何とか都合の可い樣に爾う云つてね、それから庄屋の孫右衞門さんとお隣りの叔父さんなどには、默つて出る譯にはなりませんから、お告別をして來たいと存じます」

「外は兎も角庄屋の孫右衞門さん處だけは告別をして下さい」

「ちやア是れから鳥渡往て參ります」

「爾うしてお前、何と云つて告別を云ふ心算ですね」

「それは豫ても云つて居る通り、阿父さんの菩提の爲めと」

「それが可う御座んす」

と云はれてお雪は庄屋の孫右衞門ばかりへ赴きぬ、孫右衞門の夫婦はそれと見るや。

「アーお雪さんか、何ぞ用があつて來なすつたのか」

「まア此方へお揚りなさい」

「ハイ、有がたう存じます、今日伺ひましたのは別儀でも御座いませんが、叔父さんと叔母さんに、お告別に參りましたので御座います」

「何、告別に見ゑた、爾うしてお前何處か遠方へでも行のか」

「ハイ、實は叔父さんも御承知の通り、親父は何者かの手に罹つて、非期の死を遂まして御座いますが、是れも前世の過業で何かの因果で御座いませう、では御座いますが、又親子の情にいたして見ますと、活佛の樣な那親父が、何の因果で人の手に罹つて死くなつたかと恩ひますと、子の身に取ましては絶入るばかりに悲しく思ひますので御座います、就ては私共姉弟も此の末、如何なる因果の報へ來るかと、それは〳〵恐しく思はれますので私は、發心いたす心になりましたので御座います」

「ウムなる程な、豫てより孝心深さお前の事だから、爾う思はつしやるのも無理はないが、尼寺へでも入らうと云ひなさるのか」

「ハイ、尼寺へ願つて尼になり、亡き父の菩提を弔ふ考へで御座いましたが、處が

弟〳〵の幸七も同じ發心いたして、お寺さまへ願つて僧侶になりたいと申すので御座います、それでは家が困ると阿母さんとも色々と宥めましたので御座いますが、幸七は如何いたしましても納得ませんので御座います、それから色々と商議をいたしましたが、寧その事、それぢやア姉弟二人で諸國を順禮いたし、紀州の高野山を第一として、京都に至りては清水の觀世音、江戸淺草の觀世音は云ふに及ばず、其外諸國の名山靈場を順拜いたして、亡き父の跡を弔ひ申しましたら、亡親も此の世に迷はず、極樂淨土に導かれて、彌陀佛のお側に往る〻事で御座いませうと存じましたので御座います、就ましては、母の許しを受けまして、兩三日の中に家を出ましで、順禮をいたす考へで御座いますが、跡には年老ました祖母と、一人の母が殘るので御座いますから、何分にもお願ひを申しあげます」

と述れば、庄屋夫婦もそれと推して、霎時は老の涙に咽び居た。

「ウム諸國を順禮して名山靈場を順拜なさる、イヤ道理な次第で御座る決して止めはせぬから出懸なさい、跡に殘る母御も困るではあらうが、それは必ず心配爲なさ

るな、此の孫右衛門が達者で居る間は、引受けてお世話をいたしますから、跡に心を殘さず首尾能く本望……イヤサ順拜を遂て歸つて來なさい、其孝心は神さまも佛さまも護て下さるから、大丈夫だ、心を雄雄しく思つて旅立をさつしやれ、ウム何か餞別を進せたいが、旅には物は邪魔ぢや、草鞋錢でも進せやう」

と、一歩銀一個を紙に捻つて與へた、お雪は是れを推戴きつゝ。

「では叔父さんも叔母さんも、御機嫌さまで」

と告別して立歸り、我家の門口へ來て見れば、見知らぬ一人の若武士が居るに、お雪は如何なる人ならんかと、心に疑ひつた。

《二十一》

お雪は家に入りて、件の若武士に一禮を施したるに、武士は莞爾と笑味を滿へて語りながら。

「和女が、お雪とやら云はるゝ人か」

「ハイ、私が雪で御座います」

「ウム然樣か、而て那が舍弟の幸七どのかね」

「ハイ、然樣で御座います、爾うして旦那樣は、何ぞ御用でお出になりましたので御座いまするか」

「イヤ、別儀で參つたのではないが、實は御身們姉弟が、大層孝行人ぢやと、豫ては聽き及んで居たのぢや、然るに、昨今密かに承れば、亡き父上の菩提のため、諸國を順禮いたし、名山靈場を參拜に出るとか、寔に感じ入ました、就ては突然ながら、何か拙者の寸志を餞別いたしたいと存じて、故意と訪問たのぢや、先刻からお身の母のおあさどのに色々とお身們姉弟の事を聞き及んだのぢやが、我々武士も及ばぬ雄々しき精神益す感服いたした」

「然樣に仰やり下されましては、寔に恐れ入りまして御座います、豫ては御案内さ

までも入つしやいませうが、此の村にありまして、私儕親子程、因果な者は御座いませんでね、不幸のみ續きますので御座います、殊に節とも柱とも憑みにいたす父長太夫は、何者かの手に罹けられまして、非業の死を遂ましたので御座います、子の身といたしましては、悲く存じますので御座います、それに就まして私も弟も發心いたして順禮となりまして諸國の神社佛閣を參拜いたし、亡き父の靈を弔はんと決心いたしたので御座りまする」

「如何にも御道理ぢや、嘸ぞお殘念に思はるゝであらう、就ては餞別と云つても、格別の品ではないが、諸國を順禮する中には、隨分不賴の者が多く、女や青年と見て蔑り、何時無法の者に遭遇んものでもないに因て、恁る時の用心のためと存じ、此の二品を持參いたした、長の旅路邪魔でもあらうが、切望持參して貰ひたい」と布呂敷より取出したのは、二尺一寸の細身の一刀に九寸五分の短刀だ、お雪もおあさも其意外に惘りした。

「寔に粗末なものぢやが、我家に傳る兢れも古刀、短刀はお身に長いのは幸七どのへ」

「此の樣なお立派な品を頂戴いたしましては……」

「決して遠慮をいたして下りやるな、心は薄衣の田邊三十郎が餞別、用ゐて下りやれば武士の本懷此の上もないのである」

「厚きお惠みの此の贈物、有がたく頂戴いたしまするで御座ります」

「それで拙者も滿足いたす、イヤ、意外長座をいたして迷惑を懸ました、旅へ出たら身をお厭ひなされ」

「勿体なきお詞、恐れ入まして御座いますとおあさ供侶、手を突きて挨拶すれば村の甲乙も、それと聞きて金品を持來たりながら、會釋を施して立去つた、されて、姉弟が旅立に餞別するもあつた、斯くて、其三日目は日も吉日と聞きて、愈よ姉弟は我家を出る事となりたるに、母のおあさが納戸より持出したは、人知れず準備し置たる白木綿の甲掛に同じ脚袢、背に負べき禪衣まで取揃て與へれば、姉弟は

それを推戴きて支度もいそし〳〵く、旋て順禮の姿となりたるを觀るや母のおあさ胸に堰き來る涙は門出の不吉と、押へて見せぬ程心は尙ほ悲しく、祖母さまへも告別してと云へば、姉弟は祖母の病床に至りて。

「祖母さん、是れから幸七と二人で、阿父さんの菩提の爲め、觀音樣へお詣りに參りますから歸りまでお達者で居てお呉んなさいよ」

と云へば、氣の狂ひ居る老婆は、嬉しげに起き出て右と左りに二人の孫の手を握り。

「觀音樣へ往たら、宜しくお願ひ申してお呉れ」

と頼むも哀れ、幸七は際限なしと見て姉を追立ながら。

「偖て阿母さん、今日出れば、何日歸りますか分りませんが、首尾能く本望を遂て歸るまで、切望お達者でお在下さい」

明日よりは、旅から旅の野ざらしの、身は風雲のたゝずまひ、

「おさらばで御座います、切望御機嫌能く」

と云ひ放ちて、お雪は禪衣の袖に顏を掩ば、堪り難たる母のおあさも。

「お雪、幸七、モウ一度顏を」

と駈寄て、抱き留てもとめあへぬ、涙は同じ哀別離苦、兩手に姉弟の肩を押へて、

雫時は嚴然とした。

《二十二》

豫ての覺悟なれども、懷しき母を後に殘して、住馴し我家を立出たる姉弟は、五歩にして見返り、十歩にして佇立り、倘ほも離れ難てぞ見ゐたれど、斯くてならずと氣を勵まして路を急ぎたるに、旋ては、那が我家の後の杜の杉かと、朦朧げに認むるまでに、一歩は一歩と遠ざかりて、故山も今は見ゐずなりたるが、遖がにお雪は思ひ出してか、幸七の後姿を見ながらホロリと涙を溢して。

「幸七、阿母さんは私們の氣を勵ますため、あア氣强くは仰やつたものゝ、今ごろ

は如何な考へをしてお在なさるだらうね、嘸ぞ色々に案じてお在なさるだらうが餘んまり案じ過して、お病ひでもなさらなければ可いがと、私は、それが心配で堪りませんね」

無邪氣な幸七は、姉を咎めて。

「アラ姉さん、モウ家の事を云ひ出したんですか、五年が十年でも、本望を遂て家へ歸るまでは、必ず家の事は云はない……、語るまいと誓つたではありませんか」

「それは爾うだけれども、此處には外に聞く人もなく、お前さんと私ばかりですもの、私們は怨みを霽さんと思ふ一心で出たので、氣が急いで居ますけれども、氣の狂つて居る祖母さんを抱へて、獨り家にお在なさる阿母さんのお心持を考へて見ますと、お可哀想で〳〵」

「姉さん、姉さんに其んな事を云はれますと、先へ足が進まないから、云はずに下さいそれよりか、敎はつた觀音さまの御詠歌でも、謠つて見やうではありませんか

私も謠へますからね、姉さんもお謠へなさい」

「馴れない故か、人の家の前へ來ると謠へませんね、オー爾う云へば、向ふに寺院が見ゑますが、御詠歌を謠ひながらお詣りを爲やうではありませんか」

「眞にそれが可う御座います」

と讒かに覺えた順禮歌を聲哀れ氣に謠ひながら唯ある寺院に入て姉弟は額き、霎時は口の中にて念じつゝ、寺院を立出で本道を急ぎたるが、見當りし神社佛閣は、一も漏さず參拜して其日は、五六里の道裡を步行て日も暮なんとする頃、宿を求めて夜を明し、翌朝出立して往來の人に道を尋ね、又寺院や小社に至るまで順拜しつゝ五日餘りの日を費やして漸くに、仙臺の城下にぞ入た、偖て姉弟は、東山中川村の一小村より出て、仙臺の市中を始めて觀たる時は、如何にも立派にして且つ廣く、聞きしにも優る大した御城下なりと、魂消るばかりに思ひて數日の間は、市中を順禮しながら、北の涯より南の隅、西の町より東の盡路に至るまで寺院神社を順禮終りたるが、お雪は宿に歸りて幸七に向ひ。

「今日でモウ大概、御城下のお寺や神社は拜ましたから、豫て望みの通り、お武家へ奉公して武藝を覺ねた上、何處までも彌太夫の在家を索ねて、本望を遂ませう、爾して東山の三好先生より、戴きましたお書狀のお武家さまは、那邊の何と仰やる方であるか、翌は其お屋敷を訪ねて、お前は御奉公をなさい、私も又、口入宿なりと御奉公の手傳を求めますから」

「承知いたしました、其お屋敷は是れでありますか」

と三好賢三先生よりの、添書を取出して檢れば、御城下北二番丁大内左近殿とある狀を渡した、其の書狀には、如何なる事情を認めありしかは知らねど、主個の左近にぞ、幸七は翌日、輕裝になりて大内左近方へと來たりて恭しく三子先生よりの書は是れを披見して首肯ながら、幸七を其居間に呼びて、父母の素性など訊問したる上、其の儘家僕として召使ふ事となつたに、幸七の悦び一方ならず、直ぐと姉のお雪に告て、此の屋敷に奉公住だ、さて、大内左近と云へる人は、二十五貫の知行取にて、槍術は藩中屈指の名人、劍道も又奥意を極めた達人なれば、數十名の門人も

ありて日々稽古に來る人絶ず、されば左近先生は、家僕の幸七をも日々道場に出して劍道を教へけるに、青年ながらも幸七は筋骨逞しく、劍道も日增しに上達して人々も瞹く程に進歩するにぞ、心の裡に左近先生の厚意を悦び居た。

（二十三）

姉のお雪も又、頻りと奉公口を求め居たが、望みの如く、劍道指南する屋敷があるから、此處に奉公せよと云はれて、お雪は大に喜び、直ぐと雇はれたは下土橋に住む和田勇と云ふ人だ、お雪は下女に雇れて朝夕健氣に立働きながら、道場に稽古が始まると、何事をも打棄て稽古を垣間見て他事なかりしかば、勇先生は不思議な女なりと、快くもそれと見てお雪を呼び。

「雪、お前は在の百姓の姓だとか聞いたが、お前の親父は眞實の百姓ではあるまい矢張武士であらうが、如何ぢや」

「いゝ眞實のお百姓で御座います」
「ウム爾うか、而てお前は武藝を好きか、稽古が始まると、何事をも打捨て見て居ると云ふ事だが、面白いか」
「ハイ、面白い段では御座いません、旦那さま、私は如何云ふ性分で御座いますか剣道が大好きで御座いましてね、三度の御飯を一度食きましてもお稽古を拜見いたすのが、何よりの快みで御座います」
「ウム然樣か、面白い女だな、如何ぢやそれ程好むなら、お前も道場へ來て稽古をいたしては、女たりとも武士の妻になる者は、心得置くべきものぢやぞ」
「ハイ、有がたう存じます、旦那樣、私に剣道のお稽古をお許し下さいますなら、お給金も何にも戴きません、切望旦那樣、是非ともお願ひ申したう存じます」
「それ程熱心なら宜しい、明日から道場に出て、稽古をいたすがよい」
と其翌日よりお雪は道場へ出る事となつた、例の如く、稽古に來る若者連が打聚

り。
「オイ半澤、頃日中から先生の處へ來て居る下女だな、下女としては頗るの美人ではないか、那で奥の方の百姓の娘だとか云ふ事ぢやが、城下の娘さんだつて却々及ばない、それで剣道が三度の飯より好きだと云ふのだ、就ては勇先生が面白い女だと云つて、今日から渠を此の稽古場へ出して、演武さすると云ふ事だぜ」
「ウム爾うか、それア輪快ぢやな、渠美人が來て稽古をする……今日より斯の道場は大に賑ふ譯だな、兎に角、渠が來たら拙者が手おろしをいたし呉れやう」
「イヤそれは不可、先刻和田先生が拙者に手ほどきをいたして遣れと憑みがあつたから、貴公は見物をして居たまへ」
「吾妻、旨く云ふなよ、先生が何で貴公如き者に依頼するものか」
「ソラ、美人が來たぞ」
と噂さを爲て居る處へ、入來たお雪は、人々に叮嚀に會釋を施し。
「今日より私も、お稽古を願ひますから、何卒宜しくお願ひ申します」

「爾うだつて先生からお咄がありましたから、拙者が手おろしをして進せやう、が是れまで少し稽古をした事があるかねッ」

「ハイ、いゝえ、稽古などは少しもいたしました事は御座いません」

「それぢやァ面小手の着やうも知らんぢやらうから、拙者が教へて進せやう、此の道具の方が、小形で輕いやうぢや、竹刀も是れが細くて可いぢやらう」

と世話を爲し呉るに、お雪は面小手を着て貰ひたるが、其間に今野生は、快くも面小手を着て竹刀を携へ。

「諸君失敬ぢやが、拙者が筆おろしをいたしますから、さ、お雪嬢それへお出なさい」

「ハイ、切望お願ひ申します」

「イヤァ今野の奴は、素敏事をするな、身共が面小手の世話をいたして居る間に……」

「先んずれば人を制すかねつ、今野は意外の邊まで先鞭を着る考へか、怪しからんなア、ハ……」

旋て今野は竹刀を抗て。

「ヤッ」

と立ば、お雪も立て細き竹刀を中段に身構へた樣子は、初めて竹刀を持たものとは思はれず。

「ヤ、ッ」

と互ひに打込む、お面……お小手……と、是れより毎日の稽古、和子達は女劍客を對手にするのが面白く、俺も俺もとお雪を相手に立合ふ處から、是れも日增に上達し、相手にする男は孰れも浮足なるに引替、人には云はぬ心の裡に神佛を祈りつゝ、當の讐の彌太夫を討んとする一心不乱、今は却々に、數年の間竹刀鞘を拵へた劍客連も及ばぬまでに冴たる腕前とはなつた。

（二十四）

和田先生の道場には、お雪と呼ぶ而も美人の女劍士が居ると、忽ち遠近の評判となりしかば、物好きな若者連は遠路を厭はず入門するにぞ、日增に門人が殖て和田先生の爲めにもなるより、初めは下女として置たる者なれども、今は女劍客として、客分に取扱はるゝ程となり、初心の和子達には、稽古を附て呉るゝまでに至りしにぞ、何時までも恁うして居らるべきにあらねば、一日、北二番丁の大内左近先生方に居る弟幸七を尋ねた、幸七は姉の來たるを知らされ、道場より胴を着たる儘出で來たりて。

「オヤ姉さんですか、何か急な御用がありますか」

「別に急な用ではありません、內々で相談したい事があつて來たのですが、お屋敷の都合は如何です」

「別に御用はありませんから、ちやアお話を伺ひませう、此方へお出なさい」

と門番の居る部屋へと導き。

「姉さん、お前さんが和田先生の處に居て、大變劍道が上手になつたとの噂さで御座いますね」

「オヤ、誰に其んな話をお聞きですね、まア駭いた事ね、其んな噂さをして居ますか、爾うして、お前の姉弟だと云ふ事も、知つて居るのですか」

「私は其んな事を少しも人に語りませんから、人の知つて居る筈はありませんが、此處の道場へ來る人々が、大變姉さんの噂さをして居るのですよ」

「爾うかね、そりやア困つたね、お前も大層上達したと聽いて居ますが、私も陰ながら喜んで居ましたよ、底で相談と云ふのは今改ためて、云ふまでもなく、私們姉弟は大望のある身、私も殊に、爾う女劍士などゝ噂さに立られる樣になつては、讐を尋ぬる妨げともなりますから、兎に角、私は和田先生の處よりお暇を戴き、這度は少し變つた處へ奉公を爲ますから、就れ私が沙汰をするまでは、此のお屋敷に居

て下さい」

「ハイ、可う御座います、爾うして姉さんは、何んな處へ御奉公するのです」

「何でもまア、お客稼業でも營る家へ往てね、色々の人に會て見たいと思ふのです、爾うする中には、自然、其手蔓りを發見する事もあらうと思ひますから」

「ウムなる程、それが可う御座います、私とても矢張其通り、恁うして先生の處にばかり居ましたのでは、相手の在處が知れませんから都合次第に困てお暇を戴き、外へ奉公いたしませう」

「ですけれどもお前は當分矢張、此の屋敷に居て下さい」

と、あらましの語をして立別れ、和田先生の處へと歸り來た、お雪は他に人なきを幸ひ、先生の居間に至りて。

「先生にお願が御座います」

「改たまつて願ひとは、何だね」

「ハイ、長々の間御敎授を受けまして、寔に有がたう存じます、就れ此の御厚恩を報ずる時が御座いませうが、其時節には必ずお伺ひいたして御座いますから、今日限りお暇を戴きたう御座います」

「何、暇を呉れと、爾うしてお前は故郷へ歸るのか」

「ハイ、其邊は何とも確定ては居りませんで御座います」

「ウム爾うか、實は不思議な緣で、お前が來て呉れて一年餘り、女に珍しく劍道を學び、僅かの間に人に敎ゆるまでに上達したのは、古今稀なる程であらうと、實は感服いたして居たのちや、それに就ては、本藩中然るべき緣でもあらば、俺が親となりて相當の處へ稼し、往々は立派な武士の妻女と、人にも褒らるゝを快みにいたさうと、奥と內々相談までもいたして居つたのちや、如何ぢやね、親子の緣を結んで呉れては」

「勿体もない事を仰せ下さいまして、寔に恐れ入ました次第で御座いますが、少々一身の都合上が御座いまして、御意にお任せいたします事は、出來ません身の上で御座います」

「一身の都合上とあれば、いたし方はないが、其の一身に就ても及ぶべく力をいたす考へぢや、如何ぢやね」

「身に餘りまする御恩命では御座いますが、實は少々望みのある身で御座いまして是れから江戸へ參りませんければ、なりません身の上で御座います」

「何、江戸へ往身ぢや、ウム……」

と和田先生雲時腕を組んで默考し居たが、ハタと膝を鞣。

「それではいたし方がない、望の通り今日限り暇を進せる、首尾よく本望を遂たら必ず參つて呉れ」

「先生何を仰せられますオホ、、、」

「アハ、、、」

と互ひに、笑ひに紛らした。

（二十五）

柳町の奉公人口入宿、福島屋おみね方の見世へ。

「一御免下さい」

と入來たれる一人の娘は、別人ならずお雪だ。

「お出なさい、御奉公口ですかい」

「ハイ、少しお願ひ申したいと存じまして」

「爾うですか、まア此方へお上りなさい、而て何んな處へ御奉公がなさりたいので すね、是れまでは何處かにお在なすつたの」

「ハイ私は少し在の者で御座いますが、實は一年ばかりお屋敷に御奉公をいたして 居りました者で御座います」

「在方の人で、お屋敷に御奉公なすつた……、爾うですか」

と云ひながら、其容貌を見るに、縹緻は色飽まで白く、眼のパッチリとした鼻高の方で、口元に愛嬌のある天成の美人、在方の者だなんて云ふが、如何して〳〵、此の御城下はおろか、江戸の玉川上水で生湯を遣ひ、柳橋か日本橋邊りで、磨き上た仇ものと云つても恥かしからぬを、それと檢たおみね婆さん。

「爾うして、如何云ふ處へ御奉公なさりたいのですね、町方の大商家へでも、お出なさりたいんですか」

「あの私は、何處お茶屋の樣な處へ、御奉公がいたしたいので御座いますか、私の樣な者でも、其麼處へ御奉公が出來ませうか」

「お茶屋奉公がなさりたい……、そりやア お前さん、お望みなら、何んな處へでも往れまさアね、爾うして失禮ですが、お三味線などは如何です」

「いゝえ、素より在方の者で御座いますから、其麼方の心得などは、何にも御座いません」

「では藝者と云ふのぢやなく、女中奉公ですね」

「ハイ、爾うで御座います」

「宜しう御座います、何處へでもお世話をいたしますから、少しお待なさい、芳紀はお幾歳ですね」

「ハイ、十九で御座います」

「ウム十九……、何處にお在なさいます」

「今までは、南の方の知己の處に、居ましたので御座いますが、今日からでも直ぐと參りたいので御座います」

「ちやア宜しう御座います、お茶屋の口で二三軒あるのですがね、其中に肴町横丁の、梅三から二人ばかり、遣して呉れと云はれて居るのですが、此の家は藝がなくては不可ないのでね惜いものですが、少し困りますよ」

「爾うで御座いますか、ですが其梅三と云ふ家は何んな家で御座います」

「此の梅三ですか、御城下ぢやア一と二と云つて二と下らない大なお料理屋でね、内藝者が十何人も居ませう、來るお客は商家の旦那衆や、大番頭さんと云ふ、豪商だの

財産だなんてねお客ばかり、爾うして此の家内藝者は、皆女俳優になるのですよ、ソラお前さん方だつて聞いてお在なさるでせう、梅三芝居と云ふのは、此の家の藝者が演るので御座いますよ、それですから此の家には、振附も居れば地方も居ましてね、梅三一家で、ソックリ芝居が出來ますから、折々は此の御城下ばかりでなく諸方へ買れて興行に往のです、爾う申しては失禮で御座いますが、お前さんの縹緻で、俳優にでもおなんなされア立派な立役に向ますね、お前さんの眼鼻立なら、江戸の千兩俳優の坂東彦三郎其儘ですわオホヽ」

と頻りに褒そやした、梅三の樣子を聽かされしお雪は、何とかして恁る處へ、奉公が爲したいものと考へ居たから。

「是非、爾う云ふ家へ往て見たいんですが、ねえ内儀さん、藝者や俳優になるのですから、藝も要ませうが、其外の女中なら、藝がなくたつても奉公が、出來ない事はあるまいと思はれますが、私のやうな這麼なもので出來ますなら、其梅三の女中になりたいもので御座いますね」

「なる程、それも爾うですね、お前さんがお望みなら、梅三の御主人に相談をいたして見ませう、二三日私の家に居て可ければ、お在なさい」

「では切望爾うお願ひ申します」

とお雪は、二三日口入宿のおみねの方に止宿し居る間に、おみねは梅三方に相談した處、梅三の主人がお雪を一見するや其縹緻に惚込んで、藝がなくとも是非抱へたいと、今は却つて主人より希望するに、お雪も喜び旋て梅三の女中とはなつた。

（二十六）

梅三の女中となりしお雪は、謠ふに伽陵頻迦の聲なく、彈くに松風に和するの源を持ずと雖も、怜悧の上天成の美人なれば、唯の女中として、お座敷へ出てお客を待遇し居る間に、自然と場にも馴れて來たれば、客は孰れもお雪は如何いたした、お雪を呼べと、數月ならずしてお雪は、梅三の流行女中と、持囃さるゝ程とはなつた

されば梅三の主個は、此の女に多少の藝を敎へて藝者なり、女優なりに仕立る時は將來は大した尤物になるべしと見込みて、機を見てお雪を呼び。

「お雪、おぬしに少し話があるが、如何だお前は長く俺の家に奉公をして居る氣があるか」

「素より御緣があつて、恁うしてお世話になつて居りますからは、何時が何時までも……」

「それぢやア云ふがな、おぬしは幸ひ、お客さま方もおぬしを御贔負に爲すつて下さる處だから、寧そおぬしを舞臺に出さうと思ふのだ、女優の方なら三味線がなくも出來ない事はないし、又、三味線の方だからつて出來ぬ筈もないから、如何だ氣があるなら金は要るが仕込んで進せやうか」

「親方さんが、爾うしてお呉んなさいますなら、不器用な私でも、出來ない事も御座いますまいかと存じますから、切望爾うお願ひ申したう存じます」

「ちやア爾うするからな、折角骨を折て演て呉れ」

と主個は、師匠株の甲乙に云ひ渡して、お雪に稽古を始めさせた、お雪は素より浮た氣で恁る事を好むにあらず、讐彌太夫の在處を尋ぬるには、色々の方面に身を寄せて、索ねなければならぬ故、自然色々に身をも變化せねばならず、それには順禮乞食をも厭はぬは勿論、倘し舞臺にでも登つて、多くの觀客を一ト眼に見渡して居る中には、自然讐の彌太夫が、入込み居る事のあるまいものでもないに因て、女優になるのは望む處と、主個に勸められしを、好き機に其詞に隨ひ、それより熱心に稽古に取蒐つた、それとは云はねど、和田勇先生の道場に居て、武場の道を心得あるより、立役になると何處までも、本式の武士になるは爭はれぬものそれと知らぬ人々は、唯不思議な女なりと評し居た、斯くて此年の暮の十二月、梅三連は、餅搗芝居を興行爲やうとの相談となり、暮の芝居なれば、狂言は忠臣藏の通しと、世界を定めて愈よ七日間、興行する事となつた、當時梅三の內藝者にて、女優を兼たる重なる女には、小若、德次、小浪、梅吉、小梅、文のなど云ふありて、舞臺もお座敷も馴切つた尤物其中にお雪は、塩谷判官に小野定九郎の二大役を附られて當人も、

如何あらんと苦心したればこそ賣出すには此處が大切と、鳴物入の舞臺稽古までも濟して、愈よ其翌日より、北目町の芝居小屋にて開場した、然るに、例も當り狂言の忠臣藏とて、開場初日よりの大入、最負の客筋より初舞臺のお雪に引幕を贈るもありたが、殊にお雪の扮した、判官に定九郎は非常の好評にて、お雪が舞臺を終つて歸ると、お座へ來て同人に口を懸るお客は、宛ら網の目から手の出る如、實に此の時のお雪には、充分技の熟した姐さん株も、一歩を讓りし程なりしかば、主個夫婦も打喜び。

「お雪さん、這度のお芝居では、大抵お前に喰れて仕舞たよ、那達者な小若、德次さへもお前程でないつて、お客さまが評判なさるんですもの、實にお前の定九郎は眞個千兩役者だつたね、二彈を喰て口から血泡を吹きながら、血走つた凄い眼を覩てさ、舞臺より觀家の方を睨んで仆れる處は、女俳優とは見るものはなかつた、近ごろ江戸で賣出しの嵐璃鶴が、二町目で定九郎を演て大層な評判だつたさうだが其璃鶴の定九郎を觀たお客が、お前の定九郎は璃鶴の通りだつたつて、お褒なすつたよ」

「內儀さん、嘘でも爾う仰しやつてお呉んなさいますと、嬉しう御座いますよ」と話居る處へ。

「お雪さん、お座敷で呼んで入つしやいます」

「イヤお客さまがお在なさるんで御座いますか」

「お前さんのレコが來て居てよ」

（二十七）

二階のお客が呼んで居ると促されて、立んとするお雪を呼止め。

「お雪さん、二階でお雪さんをお呼びなすつた、お客さまは、無名でお前に、引幕を贈つて下すつた方なんですからね、お前よく、お禮を申さなくつては不可ません よ、お前那の方を知つて居るんでせうね」

「いゝね、存じませんが、而て何處の方なんで御座います」
「ソラ此の間中から、お前を大層御贔負になすつて下さる、若い人なんだよ、好男子のさ」
「ちやアの、呉服問屋の若旦那さんだとか云ふ人ですね」
「那人は大町三丁目の日野屋と云ふ呉服問屋の若旦那さんでね隨分、家のためには大切のお客さまですが、殊にお前には大變なんだから、それだから、這度も内々で引幕まで贈つて下すつたのだよ」
「アラ幕を贈つて下すつたのは、那の若旦那さんなんですか、へゝ……」
「お前さんの爲めにもなる、お客さまなんですからね、其心算でお勤めなさいよ」
「ハイ畏まりまして御座います」
と二階座敷へ來て見れは、待兼居たる風情の一人の客人。
「お雪さん如何したんた、先刻から呼んで居るのに、外にお座敷でもあるのか」
「如何も相濟ません、外のお座敷などは御座いませんが、少し家のお内儀さんと、話があつたもんで御座いますから、那の引幕を贈つたのは、旦那で御座いましたそうですが、如何も何とも有がたう存じました、當人の私に默つて居て下さるんですもの、お目に蒐つてもお禮の申す樣が御座いませんぢやありませんか」
「イヤ實アな、私だつて親懸りの身分だ、お前們に幕を贈つたなんて、噂さに立られると私の都合が可くないからね、それでお前にも默まりで進せた譯さ、何にしろ這度の芝居ぢやアお前の、獨り舞臺と云つても可い位だつたよ、實に大したもんだつたな」
「如何も恐れ入まして御座います、是れと云ふもお客さま方が、御贔負をして下さいますためで御座います、時に貴郎は、江戸の方でお在なさるそうで御座いますね」

「イヤ爾うぢやないよ、眞實此の御城下で生れた者さ」
「イゝ不可せん、江戸の人て入つしやいます」
「如何してね、其んな事はない筈だが……」

「何んなにお匿し遊ばしたつて不可ません」
「何故だね」
「貴郎は江戸の鑑札を所持て入つしやるぢやアありませんか」
「俺は其んな鑑札などは所持て居ないがね」
「それだつてお詞は、國の手形だと云ふぢやア御座いませんか」
「イヤ、是りやア恐れ入つたが、爾う云へばお前も江戸の様だね」
と揶揄たに、ほゝと笑ひながら。
「恁んなお江戸の詞が、御座いませうかね」
「それでもお前は、可かすべツちやは云はんやうぢやないか」
「其んなお口の悪い事を仰やいますと、お猪口を酬げませんよ」
「其んな事を云はんで一ツ呉れ、謝まるから」
「串談はヌキに爲ましてね、眞個に貴郎は、江戸は何と仰やる所なんで御座いますの實は、私の親戚の者が、江戸に居る者が御座いますのでね、私も江戸へ登るかも知れませんですが、倘し其時は貴郎のお家の方へお尋ねいたさうと存じますから」

「ウム爾うか、そりやア懐しい事だね、ぢやア眞個の事を言ふがね、私の家は小網町の町〳〵側の照降町と云ふ處だよ、親父は袋物商だが、俺は白禿風頭の頃から、長谷川町の太物問屋へ奉公して十八の時まで勤めて居たのさ、すると、今の日野屋の主人太兵衛さんと云ふのが、毎年呉服物の仕入に江戸へ登るのだ、爾うして舊の俺の主人の處へ來るので俺の事も知り、俺の方でも知つたと云ふ理由だが、それから日野太の主人が、俺を貰つて仙臺へ連て歸りたいと、強て舊主人への願ひ、底で俺の兩親も承知で、俺は江戸から仙臺へ來て日野太の養子となつたのさ、俺も此の仙臺へ來て八年になるから、本年モウ二十五になる、倘しお前が江戸へ登つたら、照降町の袋物屋で、伊豆屋善兵衛と聞いて尋ねて呉れると、直ぐに分るよ」
「爾うで御座いますか、萬一お江戸へ登りまして御座いましたらお尋ね申しますで御座います」
と、浮た酒の相手を爲ながらも、談話は眞面目に打解た。

（二十八）

大町三丁目の太物問屋、日野屋の養子善五郎と呼ぶ好男子は、梅三に至りて酒の相手にお雪を、二三度招きしが縁となり、善五郎は、深くもお雪を思い染ては矢も楯もたまらず、店を仕舞ては三日にあげず、梅三へと通ひてはお雪を呼び、お雪が女優となりて舞臺に現らはるゝと聞いては、密々で引幕を贈るなど、惜げもなく、金錢を撒ちらしての全盛遊び、されば、お雪も善五郎を憎からず思ひて、來れば必ず、他の客を斷はつても出ると云ふまで、情を通はせて、談話も打解て語りもし、聽きもする仲とは見ねたが、されどお雪は大望のある身、外の藝者や女中們の如く、浮ては居れど其心の底には締りがありて、宛から色も香もある薔薇の花、手折らんと手を觸れば、枝に針ありて障らせず、それが又、却つて氣高く見ねて奥床しと、取囃されて今は、飛鳥も落す嬌名は坊間に響き渡つた、偖て年も暮て春の彌生の花盛

り、釋迦堂は日々花に浮れる男女、割籠に重箱に瓢酒、三味太皷を携へ行きて謠ふやら、踊るやらの樂天地、宛ら人々の花に狂せるばかりなりしが、梅三一家の男女も、主人夫婦を初め、一同晴の着物で觀櫻を爲さんと、前々より相談を取極め居たるが、愈よ觀櫻の日は明後日と迫つた、折から來たれるは、例の日野屋の若旦那善五郎だ、旋てお雪も座敷へと現はれたるが。

「お雪さん、約束をしたのをやアなかつたが、斯んな物が出來たから持て來た、氣に入か如何だかまア御覽よ」

と云ひつゝ、萠黄色の袱に包し儘をお雪の前に出した。

「オヤ、爾うで御座いますか、而て是れは一体何で御座いますね、拜見しても宜しいんで御座いますか」

「イヤ、可い處ではない、是非着て貰ひたいのだ」

と云ふに、お雪は其包を解きて中の品物を檢れば、友染縮緬の二枚重。

「オヤマア、是れは大層綺麗なお召物で御座いますね、何處かの藝者衆からでも、

注文で出來たので御座いますか、それにしても此の美麗さ、お江戸の衆は存じませんが此の御城下では觀たとも御座いませんよ」

「如何だね、氣に入ましたか」

「まア勿体ない、昔しの高尾でも着さうな衣裳で御座んすね」

「是れが昔し、元祿の頃流行たもので、元祿模樣と云ふのは是れだ、その市松の帶は如何だね、這麼ものは外に着て行ものはあるまい、とお前の觀花衣裳に江戸へ注文して漸と昨日着いたものさ明後日は、是非此の衣裳の元祿模樣で、一番釋迦堂へ出懸て、數万の人を駭かしてお呉れ」

「それでは若旦那、此の衣裳を私のために……」

「遙々と江戸から取寄せたのだ」

「アラまア、なんと云ふお嬉いんで御座いませう、如何も有がたう存じます、まアなんてゐ云ふ綺麗な模樣で御座いませうね、內儀さんを呼んでお目に蒐ませう」

「家の內儀には可いが、外の女們に見せると、氣を揉出すかも知れないからな、着て出る時まで匿して置が可いせ」

「眞個に爾ういたしませう、私が不意に此の衣裳を着ましたら、外の方は屹度駭くに違ひはありませんよ」

「それも又一興ではないか」

「アヽ快く明後日になれば可う御座いますね」

とお雪の喜ぶを見て善五郎も歡び、夜の更るも知らず遊び暮して歸つた、

さて愈よ觀櫻の當日となりたるが、此の日は殊に天氣も朗く、櫻は咲きも殘らず、散もはじめずとの眞盛りなれば、東西南北より釋迦堂へと浮れ出す人の夥だしさ、上中下はあれど、人思ひ〳〵の觀櫻支度に、梅三連も男女三十人ばかり、打揃て押出したるが、女優を衆たる內藝者は、兢れも旦那筋の客に媚顏て出來た派手揃、中に一際人目を駭かしたは彼のお雪の元祿姿だ、斯くて此の一群は、昔し奈良屋の番頭が、白無垢揃で心中を遂た場所と云ひ傳へる、彼の二股櫻の下に、數枚の毛氈を布き詰めて、飮むやら謠ふやら、一年一度の觀櫻の宴に興を盡して、長き春の日の

暮るも知らなかつたが、旋て光勝寺の入相の鐘の響きに、花ならぬ人々の散そめて大方は歸り去りたが、梅三連も狼藉たる跡の始末を爲しての歸途、お雪が計ずも危難に遭遇する。

（二十九）

日も暮初めての雀色、さしも群集せる觀櫻客も大方は歸り去りて、梅三連も立たる跡に、如何してか殘つたのは小若、德次、梅吉、お雪の四人に、おりんと呼ぶ四十ばかりの女中だ、各自に日傘を手に持て打興じつゝ、手に執まで垂込だる櫻の下を徃折しも、横合より立現はれしは三人連の、大の男の花見手拭にて頬被りを爲したるが、足も支度路に五人連の女の中へ、跟噂ながら故意と衝突つた、女連は醉漢と見て、四方へ避けて通り過んとしたに。

「ヤイ女、何だつて人に衝突りやアがるんだ、俺ちに何の遺恨があるんだ、此の俺ちに無禮な事を爲やアがつた、詫の挨拶も爲やアがらずに、立去るたア太い阿魔だ、さ、承知がならねえぞッ」

と異口同音、再び女連の前に立塞りて腕をまくり、拳固を振抗げて隙て蒐らん劍幕に、皆々打驚き、顏ひながら逃出したが中に、お雪一人は悒ともせず、堪として立佇まつたを無賴漢們は得たりと取圍みて一人は、

「小生意氣な奴は此の阿魔だ、叩き殿つて腕つ骨を折てやれッ」

と小肥の大漢が、腕の力一杯に、お雪を打仆さんとしたを、チヨイと引外しながら袂れし足元を背部よりドンと叩ければ、大漢は其場に撞と大字形、次の漢は。

「此の獸奴ッ」

と飛込んで、お雪の腕を捉へてグイと捻抗、足を搦らんで打据んとするを、お雪は。

「小癪な奴ッ」

と左りの綺麗な拳で、漢の腋の下を衝く、衝かれた危所に漢はウンとばかり、仆る

ゝ側より後の一人が、お雪の右の足を拯ひあげた、お雪は思はず臀を搗きしを得たりと、大字形に仆れし大漢が起あがつて、手頃の三尺棒を持て打込み來たるを、お雪は臀に一人の漢を押へ附ながら、携へたる日傘で丁と受止め、起直つて漢の頭部を眞向に日傘で續けうつ、打だれし一人は眼が眩んで逡巡其間に、又も一人は棒を振翳して打て來たをお雪は身を反して虚を打せた、ソレと更に三人は、皆々手に三尺棒を携へて打蒐るを、お雪は日傘一本で左右に受流し、一人が。

「ヤツ」

と立向ひしを、丁と衝たる日傘の轆轤で、敵の咽佛を健かに突れて是れも仰向つて倒る、如斯三人のお雪を相手に無法の狼藉も、お雪は一本の日傘であしらふ其早業に、不敵の惡漢們も敵し難てや、快くも那處かへ姿を晦ました、跡にお雪は、落散櫛笄を拾ひ抗て、亂れし島田髷を直しながら、逃ゆく三人の後姿を目送り居たが、恐怖て逃匿れし小若、德次、梅吉們は、木蔭より出て來たりてお雪が衣裳の芥を拂などしつゝ。

「お雪さん、お前何處も怪我は爲ないかの大の漢が取捲いて無法の目に遭せアがつて、何といふ憎い奴們だらう」

「私アお前さんが此の儘、此處で殺されて終ア爲ないかと、心配して活た空はありませんかつたよ、那奴們は一体、何で無法な事を爲たのでせうね」

「何處も痛みは爲ませんかね、眞個に怖かつたでせうね」

「意外奴に出會て、酷ひ目に遭ましたね、それでもお前さん們は、如何も爲れませんかね」

「私們は驚いて逃て終ひましたから、何ともありませんが、お前さん一人が、那三人に取繞れて、無法な目に遭されるんだから、如何したら可からうと唯、心を揉むばかりね」

「如何して進る事も出來ないんだもの」

「夫にしても、不思議なのはお前さんの働き、那麼見るも怖しい大の漢を三人相手に、而も相手は三尺棒を持てうつて蒐るを」

「日傘一本であしらいながら、物ともせず打まくり、却つて相手を」
「美事散々な目に遭せて追拂つた小氣味の善き事」
「眞實、芝居のトッタリを見物して居るやうでありましたよ、爾うして二人の奴們は、額と腕から血を流して逃て終ひましたが」
「お前さんの力は、如何して其んなにあるのですね」
「いゝね、力も劍道も知りませんが、三人に向れて私も夢中になり、目暗滅法に受たりうつたりしたまで」
と語る處へ、駈附來たは日野屋の善五郎、現場の狀況を聽いて驚きたるが、此の上にも油斷はならずと、四挺の駕籠を雇て四人を乘せ、急ぎ梅三へと送つた。

《三十》

肴町の源吉と云へば、關東以北は、出羽奥州までも其俠名を人に知られた男達、江戸にも二人となき名物と謳れし者とか、其一乾兒に今助と呼ぶ快男兒あり、江戸の雁組の親分、文七にも肖る俠客と現も尙ほ云ふ由なるが、其快男兒の今助が、供の若衆をも連ず唯一人、梅三の奥二階座敷へと通つた。
人々は、ソレ肴町の親分が見えたと、下へも置ぬ待遇に旋て酒肴は持遽れた、內儀を始め、幾人も女們が出で來たりて、親分の機嫌を取んとするを無用と歸し、唯內儀一人を殘して酒交し居たが、親分は低聲になり。
「內儀に少々、尋ねてね事があるが、外でもねね此方に居るお雪とか云ふ女だな、那ア一体如何な素性の女だね、知つて居なさるなら、聽かしてお呉んなせねな、俺が聽いたからと云つて、如何するつてね理由はないのだ、心配せずに咄して呉んなせね」
「さ、其お雪で御座いますがね、私們でも、不思議な女だと色々其素性をも訊ねても見ましたので御座いますが、何を訊ねましても、產は奥の在とばかり、親が水呑百姓で困難ますから、姉弟兩人で奉公をして居ると云ふので御座います、が妙な女

で御座いましてね、元は唯の女中に雇ましたのですが、怜悧な女で御座いまして、忽ち藝道も覺ねまして、舞臺にまで登る樣になつたので御座います」

「ウム爾うか、近頃は却々の流行妓の樣子だが、俺が内々で訊ねてゐ事があるから鳥渡其お雪を呼んでお吳んなさらねゐか」

「爾うで御座いますか、恰ど遊んで居りますから、緩りとお酌でも爲せながらお話なさいまし、唯今直ぐと呼びますから」

と内儀は、引退つたが間もなく、出で來たりしはお雪なり、それと見るや。

「イヤ相變らず綺麗なものだの」

「親分さん、好くこそお出なされました、お酌をいたしませう」

「恐れ入ますが、一ッ願ひやせう」

「何故、私のお酌が、恐れ入るんで御座いますね、御迷惑さまでも切望お爲せなすつてお吳んなさい、オホ、、」

「イヤ何の、迷惑處ぢやないが、お前の腕の立派なのにやア此の今助、眞實恐れ入

やしたよ、實に大したお腕前で御座いやすな」

「親分さん、何をお揶揄なさるんで御座いますね、私は其んな凄い腕なんざア持ては居りませんよ」

「イヤ、男を飜弄する腕ぢやア御座いやせん、お前さんの腕前を拜見して感服いたしやしたのだ、就ちやア お聞き申しやすが、お前さんは立派なお武家の、お娘御だと伺つて居りやすが、爾うして一体、那邊の方で御座ゐやすか、實ア内々でお訊ね申してゐので」

「アラ親分さん、御戲言を仰やつちやア厭で御座います、お嬢さまでも、お娘御でも御座いません、眞實、在の百姓の娘で御座います」

「それぢやアそれで宜がすが、それにしても不思議なるはお前さんの腕だ、決して尋常の腕ぢやアないと此の今助が拜見いたしやしたが、お雪さん、是れにやア何ぞ仔細のあるのぢやア御座ゐやせんか、俺も肴町の源吉の身内の今助だ、秘密は人に やア洩さねゐ又、三百人の乾兒は、腮の尖で自由にする男で御座ゐやす、匿さずに

お云ひなされア及ぶだけの力にはなつて進せますから、打明けてお話をお爲なせね
お前さんがお匿しなすつたとて、此の今助が活た眼で見抜て居やすせ」
と云はれて、お雪は惘然としたが。
「親分さん、それぢやア何ぞお覽なすつた事でも御座いますか」
「覽やしたとも、何を匿さう去る十八日の黄昏頃、釋迦堂の觀櫻の歸途、三人の漢
が、女と見て無理に云ひ懸た難題、外の女衆は孰れも逃げて仕舞たので、殘つた一
人のお前さんを取捲ての無法な狼藉、然るにお前さんは、其の三人を日傘で飜弄て
却つて辛き目見せた那時の腕前、名のある男も及ばぬ働きを、木蔭に身を倚せて覽
て居りやしたが、立派なもので御座ねやすだな」
「アラ親分さん、大變な處を親分さんに……まア如何したら可う御座んせうね、
併し親分さん、那時の事は、眞實夢中でいたしたので御座います」
「夢中で那藝が出來るものでは御座いやせんよ、匿さずにお話なせね、爾うすれア
那時、お前さんに狼藉を加へた理由も判然と云ふものだ、なア お雪さん、何と、合
點が往きませんかな」
と意味ありげの詞に、お雪も思ひ當る事のありけん、霎時は考へ居た。

（三十一）

霎時考へ居たお雪は、何事か心の裡に思ひ當る事やありけん、少しく膝を進ませ。
「親分さん、那時私に、狼藉を加へました三人の漢は、那は一体何者で御座いませ
うね、私は唯花見客の醉漢だとばかり、唯今までも思つて居りますが、私に何ぞ遺
恨でもある、人で御座いませうか、倘しも爾うで御座いますと、此の先きも又ある
事、私們の爲めで御座いませんから、お詫でもいたさなけりやアなりませんが、如
何いたしたもので御座いませう、親分さん、切望其邊の處を敎へてお呉んなさいま
し」
「爾うしてお前さんは、那な奴們に、恨みを受る覺えがあんなさるのか」

「いゝ、其んな覺ゑは頓と御座いません」

「爾うして見ると、俺の考へは達うが併し、那ア唯、醉たばかりの狼藉ぢやア決してねゝと俺は見て居るのだ、何でも那奴は何者かに憑まれアがつて、爾うしてお前さんに無法な狼藉を加へ、腕を折て不具となし、是れから自由の利かねゝ躰に爲やうと云ふ、惡巧みを企て居る者があるかも知れねゝのだ、是れから先きも餘程氣を注なけりやア不可ませんせ、喩ばお前さんが、女優となつて初舞臺ですら、此の間の如に人に大騷ぎをやられたので、其んな量見の狹ゐ猜みから、起たのなら多寡が知れたものだが、倘としたら、モッと豪ゐ事ぢやアあるめゐかと、餘計な事だがお前さんの爲めに、俺は心配をいたしやしたので、實は、今夜も故意と來たので御座いやす、殊に女に稀なるお前さんの豪勢な腕前、如何しても是れには深い理由のある事に違ゐないが、お雪さん、俺も肴町の今助だ、男の中の男一疋、お前さんが大事の情由を打明なすつたからとてお前さんの迷惑にやア必ずなりは爲ねゐから、打明なせゑ、實ア此の間、お前さんに狼藉を加へた奴等と云ふのは、新傳馬町の是れも親分と呼ばるゝ、青柳の新吉と云ふ者の乾兒だ、那中にやア奥の東山から出て來た、博徒も二人居るとか云ふ噂さでがすがお前さん、何ぞ心に當る事はありませんかゐ」

と問れてお雪は、胸中に勘なからず驚いたが、偖ては那奴們は、讐彌太夫の間牒にて、此の身姉弟が讐討に出たを、それと推して、人知れず此の身姉弟をも殺して枕を高く寢る心算ならんか、憎みても餘りある者們と、お雪は思はず憤慨の色を現はした、されとも身の大事は、人に容易に打明すべきものにあらねば、如何して可からんと止つ追つ、霎時は胸を押へて考へ居た。

「如何だねお雪さん、此の今助の眼力に、寸分違いは御座ゐやすまい、必ず大望の大事は容易に人に打明すべきものぢやア御座ゐやせんが、男の中の男一疋、此の今助にやア其御心配は無用で御座ゐやすせ」

「如何だねお雪さん、此の今助の眼力に、寸分違いは御座ゐやすまい、必ず大望の大事は容易に人に打明すべきものぢやア御座ゐやせんが、男の中の男一疋、此の今助にやア其御心配は無用で御座ゐやすせ」

ある身と睨んだが如何です、實は云々とお云ひなされア此の今助、先方の那奴們の懷ろをそれとなく探つて、お前さんにお聽かせ申しますせ、そりやアなる程、身の

と問れてお雪は、胸中に勘なからず驚いたが、偖ては那奴們は、讐彌太夫の間牒にて、此の身姉弟が讐討に出たを、それと推して、人知れず此の身姉弟をも殺して枕を高く寢る心算ならんか、憎みても餘りある者們と、お雪は思はず憤慨の色を現はした、されとも身の大事は、人に容易に打明すべきものにあらねば、如何して可からんと止つ追つ、霎時は胸を押へて考へ居た。

「如何だねお雪さん、此の今助の眼力に、寸分違いは御座ゐやすまい、必ず大望の大事は容易に人に打明すべきものぢやア御座ゐやせんが、男の中の男一疋、此の今助にやア其御心配は無用で御座ゐやすせ」

と延引させぬ男の詞、お雪も今は膝を進ませて小聲になり。

「親分さん、それまで看破つてお在なさるは追がの御眼力、恐れ入まして御座います、就きましては何事も隱さず、私の身の大事を打明してお話をいたします、がそれから改めて親分さんにお願ひが御座います、私の一身に就てお味方をして下さいませうか」

「云ふまでもなく男を賣る肴町の今助、打明ての相談とあれば火の中、水の底はおろかな事、百萬人の敵を引受ても身命の取遣、其んな事に怖ともする今助ぢやアない、安心してお話なせゑ」

「親分さん、よく云つて下さいました、實は私、東山中川村の者て御座いますが、數年前、父の長太夫が人手に罹つて、非業の死を遂られましたので御座います、爾うして其の讐は、程なく村を逐電いたして行方知れず、されど、怨み骨髓に徹する倶不戴天の仇、雲を追草を分ても索し出して、女ながらも怨みの一念、存分に復したい一心で、一人の弟と共に村を出で、旅から旅の辛苦艱難、親分さん、此の女の

胸の裡、切望御推察を願ひたう存じます」と涙ながらに其あらましを物語つた。

「イヤ、如何も恐れ入やした、此の今助百萬の敵に遣とも恐れぬ男で御座ゑやすがお前さんの胸中を察して、涙と云ふものを始めて溢しやした、恁う大事を打明された以上は、何處までも味方になつて進せますから、御安心なせゑ」と云ふにお雪は、一方ならぬ味方を得て悦ぶ事限りがなかつた。

（三十二）

追がは快男子肴町の今助、お雪が身の大事を打明されて心地よく、果は何氣なき躰に、酒を酌交して其夜は歸り去りた、跡にお雪は一人思ふやう。

「那時の狼藉者は、果して讐彌太夫の間諜であつて見ると、彌太夫は倘しや此の御城下に紛れ居るものにはあらざるか、斯る博徒などを味方に附て、此の姉弟をそれ

となく反り討に爲やうとする巧みであつたら、此の身も幸七も些しも油斷は出來ないが、兎に角、今助親分の內通を待たら、讎彌太夫の在處も判明であらう、倘しそれが判明たら、幸七と俱に多年の怨みを晴して、在所に居る、阿母さんにも歡ばせん、されど此の樣子であつて見れば、讀も味方を拵へておさ〳〵油斷をしては居まいが、愈よ讎彌太夫が此の御城下に居るとしたら、如何なる手段で渠を美事に討うか、お上へ願つたとて、私の復讎はお許しになるべきものにもあらねば、晴の場所で公然と勝負する譯にはならず、兎に角にも快く親分の內通を聞きたきもの一と頻りに其安否を待居た、又今助は、二三の乾兒に何事か云ひ含めて、新傳馬町の靑柳新吉の乾兒們が、如何なる事情に因て梅三のお雪に狼藉を加へたかを、密かに探らしめけるに、此奴們は果して奧より來たりし有藏、伊勢松、勘太の三人と判然したるが、今助の一乾兒深沼の鯉藏と呼ぶ男が、一夜有藏以下を呼出して、交際酒を飮に往うと促した、有藏們は是を否み難て。

「イヤ肴町の兄イ、ちやアお供をいたしやせう」

とそれより、四人連にて唯ある料理屋に至りて飮始めた、鯉藏は兢れもよき程に醉の廻つた頃を見て。

「オイ、時にお前ちは先頃釋迦堂の花見の時、梅三のお雪と云ふ女に、惡戲を爲たなアありやア一体如何したのだ、何か遺恨でもあつたのか、それにしても大の漢三人が那一人の女に、散々な目に遭たとか云ふ噂さだが、見つともねい奴們ちやねいか」

「イヤ兄イ、那時の事を云はれちやア面目次第もねいが、實ア醉て居たもんだからな、思はず不覺を取たのさ、何、多寡の知れた阿魔子一人、相手にした處で曲もねわから、なア勘太、勘太の野郎なんざア又カラ意氣地がねいんで、日傘の轆轤で咽佛を突れアがつて、眼を眩すなんて馬鹿な奴さ」

「兄イ、お前の那時の醜狀はなかつたせ、此の大の漢が、肥腹を拳で突れアがつて橫ッ倒しに倒れた時ア何を爲やアがるのか、まるつきし相撲にやアならねいのだ、橫綱に揮擔きが稽古を附て貰つて居るのかと思つた、アハ……伊勢だつて其通

りよ、日傘で頭をボカ〳〵殿られ」

「それと云ふのも勘太の野郎が、間抜だからさ」

「見た處は立派な漢だが、揃も揃つて骨なしばかりたア恐れ入たな、したが有藏、阿魔子一人のために那醜体を見て黙つて居るのか、實に男の面汚の奴們だな、手前ちはそれでも可からうがな、第一親分の新吉の顔に關る恥ぢやねゝか、又俺ちだからつてよ、身内が違ふと云つたからつて、同じ男を賣る仲間ぢやねゝか、矢張俺ちの顔に泥を塗つたと同じ事だ、それを思ふなら仕返しをするが可いせ、若し手前ちが梅三を相手に、仕込しをするなら、俺も親分と相談の上、立派に手前らの腰を持て進るがア如何だ」

「兄イが爾う云つて呉んなさりやア、する處ぢやア御座わやせん、立派に仕返しを爲て呉んでねもんで御座わやす」

「看町の親分が、腰を持てお呉んなさりやア世の中に、怖しいものア何にも御座わやせん」

「俺も男だ、腰を持と云つたら何處までも演が、それにしてもお前ちの、心底が解らねゝからな、那梅三のお雪に、何の怨みがあつて仕懸た喧嘩だ、察するに、大方何奴かに憑まれたのだらう、原因を云ひねゝな、それから判明なかつちやア腰は持ねゝせ」

「兄イの云ふのは道理だ、如何にも人に憑まれやしたのさ、憑まれたつてねのは、實ア俺們の旦那筋だが、那阿魔のために赤つ恥を蒙されたので御座わやす、云はゝ戀の叶はぬ怨みと云つた理由さ」

「ウムなる程、それも解つた、爾うして其旦那は如何した、矢張此の城下に居なさるのか」

「イヤ旦那は疾に江戸へ往やした」

「ウム、江戸へ往きなすつた、そりやア眞實なのか」

「なんで兄イに、虚を云ひますものかな」

「そりやア眞實で御座わやす、尤も、江戸から京、大阪、大和巡り、爾うして四國

までも……なアに金持ですから、見物に旅を爲さるので御座ねやす」と事實虚事取雜せて、忽々と饒舌たてた。

《三十三》

お雪幸七の姉弟を、人知れず殺ものにせんと附覘ふ有藏、伊勢松の兩惡漢、去る頃釋迦堂の花見歸りに、同じ伍類の勘太を語へて不意に仕かけた無法の狼藉も、却つてお雪の爲めに三人は、散々に打惱されて其場を逃失せたが、如何もして此の怨みを、返し呉んと考へ居る折柄、肴町の今助が身内に、去る者ありと知られた深沼の鯉藏が來て、腰を持から仕返しをすろと、教唆されて三人は打喜ひ、尙ほ同じ伍類の甲乙にも密かに云々を打語りて、梅三への仕返し喧嘩の手術を商議した、されど鯉藏より何の沙汰もなきに一同は、如何したものかと、尙ほも思案しながら。

「オイ伊勢松、那程に約束したのだからな、鯉藏も一件を那ッ切にする筈はねねが

お前は那ッきり鯉藏に逢ねねのか」

「逢もんか逢ば何とか話もある筈だが、お前も逢ねねのか、那野郎の云ふ事だから正可に虚ちやアねねと思つたが、是れから鯉藏を呼び出して聽いて見やうちやねねか」

「それも可いかだがなア伊勢松、那野郎も唯の鼠ちやアねねから、忽と油斷は出來ねねせ、今になつて考ねて見ると、那時俺ちを釣んと、浮頭を引に出やアがつたのかも知れねねな」

「爾うたかも、知れねねから、油斷を爲ちやア不可ねね……と云つた處で、此の間、眞實の事ア云はねねが、彌太夫旦那が江戸から京大阪、讃岐の金比羅さまでも旅をすると忽と吐たが、能くなかつたぢやねねか」

「若し鯉藏の野郎が、俺ちを釣出さんとして浮頭を引に出やアがつたのなら、俺那野郎は俺ちよりも腕節のある奴們だ、是れ又、忽

とア手は出せねねや」

「それやア爾うだが、だからよ、闇夜の晩を覗つて不意を喰はせ、一刀と殺害て終ふのだ、如何だ伊勢松」

「フン、お前の口で云ふ様に手もなく、バッサリと演りやア豪氣なものだが、爾うは問屋で、卸して呉れねねから困らアな」

「お前の様に間抜た事を爲りやア爾うかも知れねねよ、アハヽヽヽヽ」

「お前だつて、立派な口は利かれめわせ　此間は如何した、お雪の阿魔一人に向つてせね那通りだ、イの一番に、邊突張たちやねねか、意氣地のねね方ぢやア矢張、イの一番のお兄イさまだ、アハヽヽヽ」

「オイ伊勢松、見つともねね、何を吐すんだな、血で血を洗ふやうな事ア云ふなよしたか伊勢、那阿魔が劍道の稽古したと云ふ事ア聞いては居たが、那程の腕前になつて居やアがるとは思はなかつたな、俺ア實に駭いて仕舞たせ」

「一心てねものなア實に恐しいもんぢやアねねか、阿魔女の癖によ、大の漢、それも尋常勝れた俺ちを三人も相手に美事な那働きをするとア大した腕だな、那腕ぢやアなア有藏、如何豪氣な彌太夫旦那だからつて、所詮駄目だせ、何の返り討處か、俺ち二人が、助太刀に向つたつて見込はねねや」

「お雪の阿魔女でせね那だもの、弟の幸七野郎なんか、何んな腕になりやアがるか判つたものぢやアねね」

「弟で思ひ出した、其幸七の小僧は、北二番丁の大内左近さまと云ふ槍の先生の處に奉公をして居やアがるのを、俺ア確かに見屆けて來たのだが、是れから追々と腕ッ節が發道來られちやア、眞實事だ、何を云つても今の中なら、相手に足らねね奴、何とか旨く計略に引掛て奴を呼出し、闇夜を饒倖奴から先きに殺して仕舞ちや如何だ」

「ウム爾うか、幸七の奴の居處を突留て來たのか、那奴なら手は見せねねや」

「ぢやアな有藏、今夜姉のお雪だと胡魔化してよ、誘引だして殺んで終ふぢやねねか」

「二葉にして伐らねば、仕舞にやア斧を用ゐねばならねねとか云ふからな、害殺るなら今の中だ、一日でも速ね方が得策だ」

と二人の悪者、闇夜に乗じて北二番丁の大内左近方に至り、門番に姉のお雪が來たと偽り、都合よく幸七を呼び出さんとした。

（三十四）

正直な門番の老人は、昨今病氣で寢て居る幸七の枕頭に來たりて。

「オイ幸七どん、病氣は如何ぢやね、今日は些たア快方かねッ」

「ハイ、有がたう御座います、が何だが知れませんが、漸々と不良なるやうです、何分にも今日は膝が疼みましてね、歩行事も出來なくなつて仕舞ました」

「何漸々に不良なると云ひなさるのか、ムウ、そりやア何にしろ氣の毒なごんだな處で今、お前さまの姉さんが來てな、用があるお前さまに、鳥渡顏を貸て呉と云つて見ゐたが、如何するかねッ、歩行事が出來ねねのでは、逢れますめねな」

「へゐ姉が參りました、爾うで御座いますか、何の用かしら、夜分に來るなんて、何か急な用でも出來たのでせうか、ですが此の通り、疼で歩けませんからね、ハテナ如何したら可からうかしら」

「ちやア恁う爲やう、病氣で歩めねから、亦來て下つせねと云つて歸してやりますかな」

「爾うで御座います……けれども、夜分に態々來た處を見ますと、何か大切の用があつて、來て呉たのかも知れませんが、なア門番の亞父さん、何んな用だと、御面倒お前さんが、鳥渡尋ねて見て下さいませんか」

「ウム俺に聞けッ、それも可うがすが、俺ちやア解んめねな」

折から此處に居合せた大内左近の一門人、齋藤多門次と云ふ六尺豐の若侍。

「幸七の姉とあらば、身們が面會して聞いて進せやう、如何ぢやね幸七、別に不都合はあるまいな」

「ハイ、別に不都合などは御座いません、ちやア切窠貴君がお逢下すつてね、私が四五日來病氣で居ります事をも、お話お願ひます」

「承知いたした、足下の姉は、非常なる處の美婦人ぢやと聞き及んで居るが、會見いたすは唯今が始めてぢや」

「齋藤さまの助平男、娘が來たと思つて俺が出るなんて、誰がお前さまなんかに、オツ惚れるものか、アツハ〳〵」

「爺、何を馬鹿申す、助平なんて怪からん奴ぢや」

「助平男に間違ねはあんめね……アツハ〳〵」

「馬鹿を云はんで案内をいたせ」

「門の外に待て居るだア、勝手に徃つしやれアツハ〳〵」

稽古袴を短く毛脛を露はに穿し大兵男、ノツソリと門外の闇黑に立出て。

「オイ何處だ、幸七の姉さんてねのア、何處に居るのぢや、身們が代つて、鳥渡面會いたすのぢや」

と呼べど何の返事もなく、左右より現はれ來たは二人の大漢、幸七は一文奴も同樣の小僧なるに、是れは又、雲突ばかりの大侍、二人の惡漢怯りしたが。

「ヤイ、手前が幸七か、人違ねちやねねか」

闇を破つて云ひ掛た不禮の詞、美人のお雪が來たと思ひの外、二人の漢に齋藤多門次輿を醒し。

「何ツ手前は幸七か、とは不禮な詞、身們は左樣ぢやないわ、而て其方們は何ぬや」

「幸七に用があるから來たのだ、外の者に用はねね、其方們はもねねもんだ、薩摩ツ方の臺詞ぢやあるめねし、身們は左樣ぢやないわが聞いて呆れらアハ、、、」

と嘲弄ながら立去らんとするにぞ、齋藤多門次憤として。

「何を申すか不禮者、少し待ッ」

と一人の漢の腕を提へてグイと捻抗た、其力量の非常なるに流石の惡漢も。

「アイタ……ナ、何をするんだ、イ、疼ねちやねねか」

「不禮過言を吐くからぢや、一体其方們は何者ぢや、不禮を働くと許さんぞ」
「アイタ……ド、切望、此の手をハ、放してお吳んなせね」
申しません、切望許してお吳んなせね」
「不禮を働らかんけりやア許して遣はすが、而てお手前們は、幸七を呼出して狼藉を働かんとしたのぢやな」
「如何いたしやして、其んな理由ぢやア御座ゐやせん、切望お許しなすつて」
と謝るに齋東多門次然らばと捉へし手を放せば、惡漢は宛ら脫兎の如く、闇を潛つて逃失せた、此の惡漢們は別人ならず、乃ち有藏、伊勢松の兩漢にして、幸七を誘引して不意討を喰はさんとしたに、却つて力量拔群の齋藤多門次に出られて、辛き目見せられたのであつた。

（三十五）

門外の唯ならぬ物音に、門番與作は何事ならんと不思議に思ひながら、手燭を點じて窓より顏を出し。
「齋藤さま、多門次さま何か間違でもなされましたか、男同士の爭ふ今の聲……」
「ヤイ與作、幸七の姉が參つたと申したのは僞りぢや、怪しからん奴ぢや」
「如何なさいました、女は居りませんのか」
「女などは居らんは、馬鹿親父め、如何門番だからつてな、門の戸を開閉するばかりが門番の役目ぢやないわ、來訪者の何者なるかを見屆けたる末、主人方へ通せんければ相ならんわ」
「ちや人が違ひましたかねツ、ウム……、而て如何な奴が參りやしたのだ」
「狼藉者が二人參つた、爾うして闇黑を幸ひ、突然狼藉を働かんとしたが、身們が

引捉へて辛目見せたのちや、すると狼藉者は大に辟易いたして逃失居つた、察するに所、何者か幸七に暴行を加へんとしたる者に相違なし、與作、眞實幸七の姉と申したのか」

「そりやア分んねゑが、此の窓の下から、女の樣な男の樣な聲で、爾う申しましただ、そりさア存外もねゑ間違ゑだつたね、それから野郎們は如何したゞねッ」

「幸七の姉と僞り稱して、同人を呼出さん惡計であつたと思はるゝが、でも何者であるか憎き奴們ヤイ……與作、大內先生のお身の上などに、間違があつては大變ぢやぞ、以來注意をいたせ」

「それは大丈夫だ、御心配なさるな」

「大丈夫ぢやないわ注意いたせ、氣樂な事ばかり云つて居やがる、馬鹿野郎めッ」

「多門次さま、女が居なくつて、余程遺憾だつたと見ゑましたね、アッハヽヽア」

「何を云はれても、ゲラ〳〵と笑つてばかり居やアがるが、始末の惡い爺いだな」

と云ひ捨て奥へと入る。

「オイ幸七、參つた者は足下の姉ぢやないぞ」

「へゑ姉では御座いません……而て何者が參つたので御座いますか、ぢやア姉の依頼でも受けて、參つたので御座いましたか」

「イヤ其んな事ではない、足下の姉の聲色を遣つて足下を誘引し、不意に暴行を加へんといたした者があるのぢや、幸七、何と足下は恨でも受けた覺ゑがあるか」

「へゑ、爾うで御座いましたか、それは又變で御座いますね、私は他人に怨など受ます樣な覺ゑは御座いませんが、爾うして、如何な者が參りましたので御座いましたね」

「如何な者と云つて、眞闇で明瞭には分らないが、兎に角、二人の大の漢ぢや、理由は判らないが、今後とても油斷はならんぞ」

「ハイ寔に有がたう存じます、恨みを受ます覺ゑは此方に御座いませんでも、先方にあつて、不意に暴行を加へられましては、隨分迷惑で御座いますから、精々氣を注まするで御座います」

「尤も、足下の腕前で二人位の者に暴行を受たからと云つて、驚く事もなし、又、決して恐れるに足んけれども、併し腕を憑んで敵手を蔑り、爆軽な事をしては却て身の仇となるもの故、其邊も承知して居るが可ろしい」

「ハイ、色々と有がたう存じます、今宵の災難は眞實、貴君の爲めに免れましたので御座います倘し私が姉と思ひまして、病氣を押て面會に出ましたら、如何な目に遭されましたが分りませんで御座いました、實に仕合な事をいたしました」

「平生の足下なら、恐る〳〵に足んなれども、何にしろ足の立ない昨今の病氣、危險千萬な事であつたな、君子は危きに接近ずちや、相互將來に望みを懐いて居る青年は、躰が大切ちや、イヤそれには病氣も大敵ぢや、折角藥用をしてな、一日も速かに全快したまへ」

と慰めて、齋藤の立去つた跡に幸七一人、膝節の疼を察すりながら。

「ハテ不審だ、此の身に暴行を加へんとしたは、是りやア何でも讎彌太夫方の廻し人かも知れんが、時も時とて此の病氣ゐ〳〵殘念……何にしろ姉さんに快く此の事を知らせ置ぬと、姉にも仇する奴のないとも限らない」と病床にありながら、幸七は頻りに心配し居た。

（三十六）

幸七の病氣は、日增に重りゆくばかりなるに、當人の苦みは云ふまでもなく、主人たる大内左近方でも心配し、出入の醫師を招きて治療を加へ居たれど、却々に重病とて、全快に至るまでは尚ほ多くの日子を要する見込なれば、人々も氣の毒がりて病床を慰め居た、例の門番の與作爺が來たりて。

「今日は如何だねッ、疼は去ませんかね、さ粥が出來たから喰なさい」

「ハイ有がたう存じます、餘まり疼いので喰物も頂きたくはありません、後刻で食きます」

「恁う腫た處を見ると、疼のも道理だ、が併し、飯を食ないと漸々衰弱するだから

何でも食なくつちやア不可ないと、昨日も醫者どのが云はれたちや、和りと炊た粥だ、梅干で食て見なさい」

「ハイ、有がたう御座います、ちやアア喰きます、門番の亞父さんには格別、其外の方々にも、色々と御心配を受まして、何ともお禮の申す樣は御座いません、就ては ねゑ亞父さん、寔にお氣の毒でありますが、願はれますまいかね」

「何、姉さんの處まで言附……可いとも〳〵、今の處では御主人の用もなし、直ぐと往て進せやう、而て姉さんの處へ往たら、何と云ふのだね」

「ハイ用の趣きは逢て直に申しますから、切望姉に直ぐと來て呉つと爾う云つて戴けば、それで可いので御座います」

「ウム爾うかちやア往て來ませう、外には如何だね、なんなら飴でも買て來て進せませうか、ヤレ〳〵可哀想に、親御でも側に居たら、思ふ通りに手も届くだんべゑが、なア幸七どん」

「いゑ如何いたしまして、此の樣に御親切に爲すつて頂きますのは、眞實親姉妹も及ぶものでは御座いません、それ故、御主人樣へも餘りにお氣の毒さまで御座いまして心配などはせずに、一日も速く癒んなせゑよ」

「何のお前さま、病人が其樣な事を心配をいたして居りますので御座います」

「亞父さんの御親切は必ず忘れません、全快さへいたしますと、屹度御恩報はいたします」

「ちやア是れから、姉さん處へ往て進せますから、まア待て居なされ」

と與作は出去りぬ、正直な親切な門番の與作は、旋て肴町横丁の梅三へと至りてお雪を呼出し、幸七が先頃中より、大病に罹りて苦しみ居る由を語り、都合が出來るなら直ぐと出向て貰ひたいと云はれてお雪は、一方ならず心配し。

「寔に什麽、有がたう存じました、嘸ぞ御主人さまでも、御迷惑さまを爲されますで、御座いませうが、是れから直ぐに私が伺ひまして、何の樣にもいたしますから

御主人さまへも切望可しく、お願ひ申しあげます」

「ハイ、申します、ちやア今に、お前さまが來なさるのだね」

「ハイ、實は私の方にも、弟に是非逢ませんけんければなりません、用事も御座いますけれど、病氣で居りましては……」

「而て直ぐと來なさるのか、ちやア歸つて幸七どんに爾う云つておきます」

と別れた後間もなく、梅三のお雪は主人大内方への手土産の菓子折を携へて、北二番丁へと尋ね來た、お雪はまた大内先生の妻女に面會して。

「私は、幸七の姉の雪と申す者で御座いますが、弟は又、不思議な御縁で御鴻恩を蒙りまして、寔に有がたい事と存じます、疾にも參上まする筈で御座いましたが、私も主人持なもんで御座いますので自由にもなりませず、夫故思ひながら失禮さまを申して居りまして御座います」

「お前が姉さんか、幸七は若年に珍しく、善い若者と、先生にも可愛がられて居ますが、可哀想に此の程中より、病氣に罹つて惱んで居ますのでね、爾うして醫師の云ふには心配もなるまいが、長引と云ふのです」

「嘸ぞ〳〵、御迷惑さまで入せられました第で御座います、實はそれも、今日初めて御門番の方に伺ひましたので御座いますから徃て見て遣て下さい」

「爾うでありましたか、部屋に寢て居りますが、有がたい事で御座います、先生さまへもお目に懸りまして、就れ御禮を申し述ますする筈で御座いまするが、奥樣よりも、失禮さまで御座いますけれど、宜しく仰やり下されます樣、お願ひ申しまするで御座います」

と述て幸七の病床へと來た。

（三十七）

「幸七、何うしましたね、病氣だつたさうですね、爾うして一体、如何な病氣なんですね」

「オヤ姉さん、來て下すつたんですか、如何も寔に有がたう御座いました、如何したんですか先頃中より、此の左りの足の膝節が疼出したのが、初まりで御座いましてね、最初は色々の手當も爲たのですけれども、日増に疼が甚くなりまして終には一歩うして寢た切起る事も出來なくなつたので御座います、御主人樣でも色々と御心配下すつてね、お醫者さまを招で下さいまして、お手當も下さるんですが、却々全快に至らないんです、尤も、お醫者さまのお見込でも、心配する事はないが長引と仰やるのです」

「そりやアまア、何にしろ大變だつたね、疾く知らして呉れば可かつたのに、お他人さまにばかり御迷惑をお懸申して、相濟なかつたね、それにね」

と四邊を見廻して聲を低くし。

「譬の間諜が、此の御城下に入込で居ましてね、私們姉弟を覘ふ者があるのですから、些しも油斷が出來ませんよ、此の間私は、釋迦堂のお花見の時、三人の大の漢に不意に無法な事をされて、意外迷惑をしたのです、それもお前さんに話をする筈でありましたが、其事に就て肴町の今助親分が、相手の樣子を偵察て下さると云ふのでね、其樣子が知れたらお前と相談する考へで居たのでありました」

「爾うで御座いましたか、姉さん、それは確かに讎の間諜に相違ありませんよそれは、此の間私の處へも來ましたよ」

「アラ爾うかね、それから如何しましたね」

「それがね、恁うなんです、姉さんが用があるから、鳥渡顏を貸て呉と云つて來たものがあるんでも、折から私は病氣で脚が立ないんでせう、如何したら可からうと考へて居ると、此處に居合せた先生の門人、齋藤多門次と云ふ人が出て、姉さんに

逢て病氣で居る事を話して、爾うして用の趣きも聽いて進せ樣つてね、御門外へ出ると、闇黑から怪しい二人の男が現はれて、突然暴行を加んとしたのであつたさうですが、處で、多門次さんは、武藝も達者な力もある人なもんですから、却つて二人に辛目遣したのです、それで二人の曲者は、闇に紛れて逃失たと云ふのですが、察するに、是れも姉さんに暴行を加へた奴に違ひありません、實に油斷はなりませんよ」

「顧ふに讐彌太夫が、私們姉弟が親の讐討に出たと知つて、內々惡者を語へて、密かに私們二人を亡物にせんとする爲めでありませう、實に憎むべき奴は讐彌太夫です、然るに、肴町の親分が色々の手段を用て偵察て觀ると、彌太夫は一旦江戶に赴き、それから京大阪より讃岐に渡り、金比羅さまへ參詣して更に江戶に戻り、長く江戶に足を駐ると云ふ決心でね、昨年の內に此の御城下を出發したとか云ふのですから、それに就ては、私們も何時までも、此の御城下に居た處で仕方がありませんから、兎に角江戶へ登つて、彌太夫の在處を尋ねんと思ふのです、然れど、お前さんの此の病氣では如何する事も出來ませんから、一日も早く病氣を癒して、それから

の事に爲ませう、併しねね幸七、此處に居うしては、御主人や外の方々にも、御迷惑が罹りますから、何の道、お前さんは私の方へ引取りますが、爾うするには、如何な處でも一軒の家を借なくつてはなりませんから、明一日待て下さい」

「江戶へ登うと云ふ此の矢先意地惡くも私の此の病氣、姉さんに心配を爲せて寔に相濟ませんが、實は恁うして先生の處にお世話になつて居ましては、お氣の毒で堪られませんのです、それで今日姉さんを呼びましたのも、其御相談を致さうと存じましたので御座いますねね、姉さん、如何か出來ませうか」

「外の事と違ひますから、仕方がありません、お前さんを置家を借ましたら、釣り臺で迎に遣しますから、其心算でお在なさい、御主人樣へは私からお話を申しあげて、お暇を戴いてまゐります」

「ちやア姉さん、寔に相濟ませんが、切望何分にもお願ひ申します、實はそれが心配で膝の痛ようも、却つて苦るしかつたので御座いました」

「モウ心配する事はありません」

とてお雪は再び先生の奥方に委細を語り告、幸七を引取る事にして立歸つた。

（三十八）

梅三のお雪は、肴町の俠客今助親分の義俠心にて、讎彌太夫方の間諜なる有藏、伊勢松們の語る處、それも明瞭に云はねど讎彌太夫は、一旦江戸に登りそれより京、大阪を經て金比羅詣を爲した上、再び江戸へ戻りて足を駐むると推察する事を聞き得たとすれば一日も速く江戸に赴かんと思ひ決めた折も折、弟の幸七が重病に罹りて、身さへ動かせない終末に是非なく、お雪は人々を頼みて貸家を探したるに、幸ひ立町の裏家に不用の隱居所のあるを貸受、病に苦しむ弟幸七を引取りて此處に入れ、從來の醫者は勿論、尚ほ町醫で有名なる、南條良庵と云ふ外科醫者を迎へて治療を加へ居た、偖て斯うなると、自分は素より奉公人の躰とて、日夜附添て看病

する譯にもならねば、一人の女を雇て是れを附置、食事の世話から藥の手當に至るまでも爲せ、又、朝夕は更なり、間さへあれば來たり居たれど、幸七の病氣は初めの診察の如く、愈よ長引て容易に快方に向はず、偖幸七は、如何なる病氣に罹りしかと云ふに、其當時は寒氣に冒された結果なりと云ふまでなりしが、今で云つて見れば、僂麻窒斯とでも云ふべき病症なりしならん、お雪は看病しながらも、一方ならざる心配し、人こそ知らね姉弟は大望のある大切なる身の上。

「今日までも容易ならぬ艱難辛苦を爲しつゝ先生方の御厚意にて劍道も漸く熟達するに至りたれば、此の上は一日も速く彌太夫の在處を探して、多年の怨を霽さんため、江戸に向はんとする間際に至りて、倘しも弟の身に凶事でもありては、懷しき一人の母を故郷に遺して旅の空に出たる甲斐も水の泡とならん、本望を遂るも姉弟一緒とこそ誓ひたるに、不幸重なりて此の身一人となりては、弓矢の神も憑むに足ねば、共に身を捨て死靈惡鬼と化し、讎彌太夫を八裂にして怨を霽さん、去りな

がら、倘しも恁る事のありては今尚故郷に一人佗しく暮しながら、姉弟が本望を遂て歸るを待たまへる母上は、如何に思ひなさるであらうか、それを思ひ是れを考へると、弟の病氣は一日も速く、全快さして旅に出ねばならず、此の上はお醫者の勸めに隨ひ、如何なる高價良藥をも求めて服させねばならぬが、神佛を祈念は易けれど是ればかりは金次第、如何したら可からんと、病人の背を撫ながら思案に掻暮居る折から、入來たりしは日の屋の若旦那善七郎であつた。

「オヤ若旦那、如何して這麼處へ……」

「來たからと云つて心配爲なくも可いではないか、餘人にあらぬ私ちやもの」

「いゝえ、心配いたすと云ふ理由では御座いませんが、這麼處へ若旦那がお出下さいましては面目次第も御座いませんですもの、まア、病人の居る處で御座いますが、切望お抗り下さい」

「病人の見舞に來たのだもの、病人が居なくつちやア困らアな、、、、、時に御

病人は如何だね、少しは快方かね」

と、云ひつゝ家へと抗りたり。

「見苦しい處へお出下すつて寔に恐れ入ります、有がたう存じます、病人も何で御座いますか、はか〳〵しく快なりませんで困つて居ります、お醫者さまも色々と御心配下すつて、お手當を爲すつて下さいますんで御座いますが、如何も想ふやうで御座いませんで、心配をいたして居りますので御座います」

「ウム、何にしろそりやア御心配な事だね、爾うして、此の弟さんと云ふのは、矢張何處へか奉公でもして居なすつたのか」

「ハイ、是れまでは、お屋敷に御奉公いたして居りましたので御座います、唯た姉弟二人切で御座いましてね、弟も私一人を憑みにいたして居ますもんですから可哀さうなんで御座いますよ、それで御座いますのに、高價お藥を調めて服せます事も出來ませんでそれ故、恁ういたして長引くかと存じます」

「高價藥で、良藥があるのですか」

「ハイお醫者さまからのお話が御座いますのですけれども……」
「ウム爾うか、それならば何故私に敏く爾う云つて呉ないのだ、而て其藥は」
と善七郎は膝を進めた。

《三十九》

「外に身寄もなき姉弟二人が、思ひ思はれて斯うして居る中で、其唯一人の弟が此の重病に罹つての困難、實に察し入よ、お前さんが云はゝ浮た事の贅澤な事にさへ費用を出した私ぢやないか、況んや弟が是れ程の大病に罹つて居るのに、高價な藥が購て服する事が出來ないなんて、お前にも似はんではないか、遠慮なく私に、云々と云つて呉れば如何にもするものを、一日速ければ一日弟の病氣が快よくなる道理ぢやないか、詰らん事を遠慮したものだな、而て其藥は何と云ふのだ、何れ程高價ものかは知んが、多寡が知れて居るではないか」

「色々と、御親切に爲すつてお呉んなさいますので、今日までも恁うして居りますのに、此の上にも、何ぼなんでも爾うは苦旦那へ願ひますのもお氣の毒でなりませんから、實は御相談を願ひ難て居りましたので御座います」
「それが惡い遠慮と云ふものだ、唯た一人の大切の弟が、死生の間にある此の場合氣の毒などは云つて居られるものではないよ、今にもお醫者がお見ねになつたら、買合る藥を伺つてな、其價の處も豫め聞いて置きなさい」
「ハイ、寔に何とも有がたう存じますでは、お醫者さまがお出下さいましたら、伺つて置ます……が何でも朝鮮とやらから持て來るお藥なそうで御座います」
「兎れ那麼高い藥は、支那か朝鮮から持て來るのだ、決して心配せず需むるが宜しい」
「ハイ、では爾ういたします、是れ幸七や、此のお方はね、私が色々とお世話を受て居ます日野屋の若旦那善七郎樣と仰やるのだよ、唯今も、お前の病氣を御心配下すつて、お見舞下すつたのですが、高價お藥を需めて下さると仰やるのですから、

お禮を申しあげなさい、其お薬さへ用ゐますと、其日からでも日増に快なるとお醫者も仰やいます薬ですよ」

「ハイ、爾うで御座いますか、是れは〳〵若旦那さま、姉は又、色々とお世話さまを受まして有がたう存じます、其上ならず、私の病氣の事までも御心配下さいまして、何ともお禮の申しあげやうも御座いません、有がたう存じます」

「イヤ、お禮などには及びませんよ、豫て姉さんからお前さんの事は聽いて居ましたが、以外病氣に罹つて、嘸ぞ困難でせうね、併し今姉さんの云つた通り、高價お薬を購て用ゐれば、必ず全快すると云ひますから、安心して居なさい、呀ア、それにしても感心なものは、お前さん方二人だ、恁して姉弟が思ひ思はれて心を盡し合て居るを見ると、實に私は涙が溢れます」

「其又、他寄のなき此の不幸の姉弟を、憫然に思つて下さいます若旦那さま、私共姉弟の爲めには、眞實の御恩人で御座いまする」

「何、恩と云ふ程でもないが、世話になるも世話をするも、人間はお互ひの事さ」

「若旦那に、恁う云ふ御親切を受ますのも、何かの御縁で御座いませう」

「元を糺せば赤の他人だが、不思議な事より恁うして、懇意になつたのも深い縁には相違ないが、私は當座の事でなく、お互ひに此の世の中に居る限りは、親くして居たいと思ひます」

「それは若旦那よりも、私共の願ひます事で御座います、他寄なき此の姉弟を、生涯お見捨なく願ひたう存じます」

「此の菓子は、出がけに塩瀬で買て來たものだ、惡いものではあるまいから、幸さんに進せては如何だね」

「オヤ爾うで御座いますか、是れは結構な物を頂戴いたしまして、如何も有がたう存じます」

「イヤ、余り長居をして病人に障つては、却つて宜しくない、暁れ明日又來ます」

「爾うで御座いますか、如何も御親切さまに有がたう存じました、寔にお粗末さまを申しあげまして……」

「モウお歸りで御座いますか」
「又、明日も來て見ますが、此の上にも大切になさいよ」
「ハイ、有がだう存じます」
「ちやアお雪さん、明日來るからね、藥の事は心配なく可うがすか」
と立行善七郎の後姿を見送るお雪は。
「まア世の中には、賴母敷人もあるものだねえ」
と己知らず、恍惚として障子をも締難居た。

（四十）

身に大望のあるお雪とて人の子、其の男女の間を解せぬにあらねば、流石に親切な善七郎は憎くも思はず、前々よりも大望さへ遂し上は、此の人に一身を任せるも不足はなしなど、密に思ひ居たるが、弟幸七が死生をも期せざる大病に罹つた命の瀬戸際、醫者よりは高價の藥の買合を促されしも、素より普通の藥代すら出し難き今の身の上、如何なさんと思案に餘る處へ、見舞に來た日野屋善七郎に聽かれて、易々と承知で立歸つた翌日、金子五十兩を持來たりてお雪に渡した、是れ程の金子は無用なりとお雪は押返したるも、善七郎は此の後の費用も要ならんとて強て渡した、偖てお雪は、其金子にて醫者より云はるゝ通り、小谷と云ふ藥種問屋に至りて藥を需め、是れを用ゐた結果、果して幸七の病氣は日增に快方に赴きたるにぞ、お雪の悅び大方ならず。

「幸七、今日は如何ですね、疼は些しは減じましたが」
「姉さん、滅じた處ではありません、今日は忘れたやうに疼は減退ました、疼がありませんと自然、躰を動搖にも自由で御座いますし、又氣分も宜御座います、實に那のお藥の効で御座いますね、お醫者が買合しろと云ふ高價お藥だけありまして、大したもので御座いますね」
と喜びながら、云ふ幸七の顏を打視りて。

「まア爾うかい、そりやア何にしても可い案排ですね、切望まア一日も速く平癒て下さい、お前さんの病氣さへ平癒て下されば、一日も速く江戸へ往ますから、それを樂みに力を附て下さい」

「ハイ、爾ういたします、が姉さん、其江戸へ登るに就ては、何かお聽きなすつた事でも御座いますか」

「ハイ、それは那の、お前さんが大病で居ましたから、別に話は爲ませんが、實は肴町の今助親分の御親切なお力添でね、那の彌太夫が、確に江戸に身を忍ばせ居る樣子を聽きましたから、如何してもお前さんと二人で、愈よ江戸へ登る考へです、切望其心算で癒つてお呉んなさい」

と聞いて幸七は急に勇氣を增し。

「姉さん、爾うして見ると彌太夫は、愈よ江戸へ往たに相違ありませんかね、ウム。それに就ても此の私の病氣、是れさへなかつたら、今頃は江戸へ登つて、讎彌太夫の在處を探して居たかも知れませんでしたね、實に遺憾な事をいたしました」

「亦其麼事を考へ出すと、病氣に障りますから、何にも云はずに速く快つて下さい」

「イヤ、如何にも爾うで御座いますが、此の上にも精を出してお藥を飮きます、が實は私もそれと申しませんが、此の病氣は如何しても癒ないかと思ひましてね、恁して、姉さんに御迷惑を懸て居ます位なら、那の刀で、一ト思に腹でも切て、死ふかと存じました事が度々御座いましたのは、眞實、日野屋の若旦那の庇蔭で御座いの病氣が、斯くまで平癒に向へましたのです」

「それと云ふのも皆私們姉弟の一心を神樣がお護下さるので御座いませう」

「それも爾うで御座いませうが、若旦那の御恩は、決して忘れて下すうてはなりませんからね、此處へお出下すつた時は私も申しあげますが、お茶屋の方へお見ねになりました節には、呉々もお禮を仰やつてお呉んなさいよ」

「それは可う御座んすが、私はそれよりも少し困る事が出來ました」

とお雪は思案し居た、是れは必竟、日野屋の善七郎が、算筆も達者な上怜悧にして商法の道にも敏腕と云はるゝ男なれども、お雪に大望のある者とも悟り知らず、其色香に迷ひて金を浪費し、自然親切など盡し居るものなる事勿論なれば、お雪も其情に絆されて義理に溺るゝに至るべきを、豫知しての心配。

《四十一》

さしもに重き幸七の病氣も、高價の藥は爭はれず、日に日に一枚紙を剝すが如く、快方に赴きて今は步行さへ自由となりたれば、此の分ならば日ならずして床を放るゝ事を得べしと、悦ぶ顔を觀る姉のお雪は、愈々是れで大丈夫と漸く安心して梅三へと立歸り見れば、奥座敷には例の若旦那善七郎來たりてお雪の歸るを待佗居た。

「お雪さん、先刻から若旦那がお出になつて、奥座敷に居なさいますよ、切望快くお出を願ひます」

「オヤ爾うで御座いますか、それは寔に、相濟ませんで御座いました、病人の處へ徃ますと、色々の談話や用事があるもんですから、ツイ遲くなりまして、お氣の毒さま、餘程お待せいたしましたかしら」

「何、それ程でも御座いません、而て病人は、如何で御座いますか、日增にお快しい方なんで御座いますか」

「ハイ、有がたう存じます、皆さまに御心配を戴きました庇蔭さまに、日增に宜しい方で御座いますから、安心をいたしました」

と衣物を着替て善七郎のお座敷へと出た。

「ウム歸つて來たね、病人の處へ徃たと聞いたから、如何かと思つて居る處さ」

「如何も相濟ません、遲くなりまして」

「如何だね病人は、漸次に快方かね」

「ハイ昨今は步行も自由になりまして御座いますから、御安心を願ひます」

「ウム爾うか、そりやアまア、何にしても結構だつた」

「是れと申しますのも、眞實若旦那の庇蔭さまで御座います、弟の一命は若旦那の御親切で拾ひましたので御座いますが、如何して此御恩をお報ひいたしませうかと心配いたして居りますので御座います」

「イヤ、禮など云はれやうと思つて爲るのではないから、切望決して其樣事を云つて呉るな、したがお雪さん、其お禮などは素より云つて貰ふ考へはないがな、私の此の胸の裡をだ、お前さんが酌で呉れば可いと思ふだけだよ、實は野暮にうるさく來るかとお前は思つて居たらうが、喰附れた煩惱の犬は追ども去らずと云のは、此の善七郎自らの事であらうとは思ふが、思ふけれども其れを諦める事は出來ないのだ、如何しても斷念が出來ないのだが、お雪さん、哀れむべき此の善七郎の胸の裡を酌んで下さい、それとも、お前は氣強して此の善七郎は、愚物だ、女に鼻毛を延して夢中になるとは、餘程愚鈍人間だと、正可に爾う、一口に云つて仕舞やうな花柳の慣ひの薄情な人とは、私も初めから思つたのではない、がそれとも又、私の眼鑑が違つたのか如何だねお雪さん、それとも外に、何か仔細のある身かは知らないが、決してお禮は云はれんでも可いから、切望此の私の胸の裡を察して、お前の實意のある處を見せて貰ひたいのだ、爾うして居る煩惱の犬を追て貰へば、其上で私は決心する事があるのだ」

「若旦那のお胸の裡は、私、能くお察し申して居りますので御座います、私とても木の股や石の間より生れました者でも御座いませんから、其位の事は解つて居りますが、私は此のやうな稼業をいたして居りますけれど、一旦肌身を許した人とは、生涯夫婦となつて暮したいと念じて居ますのです、又生涯妻として下さらん樣な人には、目前に黃金の山を積れましても御意には隨ひません、處で若旦那は、御城下で二三と云はるゝ太物問屋日野屋さんの御相續人、如何互ひに思ひ思はるゝ仲で御座いましても、流石に大町の大商人衆、梅三の女中風情を嫁御と爲されまする譯は御座いませんから、實はそれで强面い事を申して居ましたので御座います、嘸ぞ、薄情な女と御召してお在なさいませうが、必ず此の雪は、木石同然の女で解る事を知らぬ者でも御座いません」

「なる程、それも道理な考へだが、それぢやア倘し、私が日野屋を去てお前と生涯夫婦になつて暮すとしたら、如何するね、それでは倘は否と云ふだらうな」

「正可に、其やうな薄情な事を申す雪では御座いませんが、此の間も申しました通り、慄つといたしますと、江戸へ登らねばなりませんから、すると矢張、若旦那と一時お離れをいたしませんければなりません、爾うなりますと寧そ、心苦う御座いますから」

とは云つたが、憎くも思はぬ善七郎が切なる愛情に、お雪の解て春温かき夢路に入しや否、筆者は知らず。

（四十二）

お雪幸七の姉弟をそれとなく殺して、彌太夫を始め、己れ們も枕を高く世を送らんものと、密かに附覘ふ悪漢有藏伊勢松の兩個は、肴町の親分、今助が義俠に出た計

略とも知らず、深沼の鯉藏が詞に忽と乗せられ、梅三へ喧嘩の仕返しに花を咲せんとしつゝ、自分們の秘密のある事をも打語りて味方に憑みたる處、其後鯉藏よりは何等の音沙汰もなきに、偖は那奴に、一杯嵌られしかと悔めど相手は、音に響きし豪の者、重なる鬱憤を霽したくは思へど敵する事が出來ず、唯陰辨慶の空威張、暫くは鯉藏們の擧動を伺ひ見たに、何ぞ計らん鯉藏們は、味方と思ひし那奴們は敵方と判りしかば愈よ無念の事に思ひ、此の上は更に味方を憑て仕返しを爲さんと考へ居たり、弦に又、藩の組侍ひ山田平內と呼男あり、若年の頃より三道樂に身を任せて、侍に有間敷行ひに親戚知人は、山田家の身代を失ふを氣支て平內に強て隱居せしめ、相當の養子を求めて先づ山田家を安泰の內に置たるが、山田平內は隱居者となりしを幸ひ、爾來は益す橫道を極め、城下の料理店を始め、近在の飮食店は侍を鼻に掛て荒し歩き、農民や町人を相手に喧嘩を吹掛、或ひは斬たり或ひは鞭たりして、良民を苦むる事數知れず、ソレ山田が來た平內が見ゆるぞと、往來の人々は十丁先きより路を讓り、又は橫丁に逃入る者もありしを、山田は却つて是れを面白

がりて、無法の事のみ働き居た、さて片平町より米ケ袋へ通ずる處、俚俗鹿子清水と云ふに三軒の料理屋ありて、湧出る清水を呼物に客を呼ぶにぞ、夏季は殊に繁昌したるものとか、其が中に藤棚と稱する茶屋あり、例の山田平内此の藤棚の離座敷に、一人陣取りて女に酌をさせながら、グビリ〳〵と飲居た、元來山田平内と云ふは、色白く眉秀パッチリとした黒目の瞳涼しく、鼻も高ければ唇には、丹花の紅を差たる如き顔るの美男子にして、常に黒紬五所紋の袷を素肌に着流し、白献上博多の帯を締た脇に、二尺四寸の細鞘の一刀を落し差と云ふ、忠臣藏五段目の小野定九郎と、花川戸と白井權八を掏雜た如な風采は、誰目にも水際立て見られた、折から入來た二人連の遊び人あり、是れも次の座敷に座を占て酒肴を注文したが、旋て女の持來たを、二人は酌交しながら、何事をか密々と談じ居たるを、山田平内ジロリと睨んで。

「ウム、這奴們は町方の遊人だな」

と言つゝ其切々に聞ゆる相談の節々を何うやら穏でない様な事もあるので、山田は愈よ耳を聳て窺ふを二人の遊人も如何やら、一曲あり相な侍と撿たりけん、密かに女に向ひ。

「オイ姉さん、隣座敷に居なさるお侍は、何てゐ方だか、姉さんは知つて居なさるか」

「ハイ存じて居ります、那が名高い山田さんと仰やる、無法な人で御座いますから下手にお詞などをお掛なさいますと、それを機に喧嘩を吹掛られましてね、始末が附ませんから、切望お氣をお注下さい」

「ウム、名は聞いて知つて居るが、那が山田と云よ無法侍かウム……なる程、年は三十二三の樣子だが、立派な好い男だな、那で無法な事をして人を斬たり、殴つたりの乱暴を働くとは思はれねゐな」

「なア兄イ、那な待を一人俺ちの味方に有やア仕事ア立派に出來るぜ」

「ウムなる程、是れア思ひ附だ、如何だ交際になつて見やうちやねゐか」

「なア姉さん、何程無法な侍だつて、此方で酒を進物て頭を下りやア、正可に無義

非道な無法は爲さるめいな」

「それは爾うで御座いますとも、女になどは却々お優い方で、此方から下手に出て參りますと、無法な事は爲さりやァ爲ませんから」

一ちやァ姉さん、肴を二品ばかりにお酒を附て、特別に拵へて持て來て吳んなさいて吳んなさい」

と注文した、女は云はるゝまゝに誂へ物を持來たりしかば、時分を計つて二人の遊人は、山田平内の座敷へと來た。

（四十三）

「眞ッ平御免下せゝまし、此處で御目に蒐りましたを幸ひ、旦那へお目通りを願ひてゝと存じましてな、失禮さまでは御座ゝますが、鳥渡伺ひましたので御座ゝます

お目通りをお許し下されませうや」

と廊下に兩手を突て式臺した、それと見るや山田平内莞爾と笑を添へて。

「見受る處は、町方で男を磨く俠客と思はるゝが、苦うないわ、二個共此方へ入れ」

「是れは甚麼、早速にお許し下さいまして有がたう存じます、手前們は仰せの如く如何も町方の者で御座ゝまして、新傳馬町の青柳新吉の身內、有藏と申すもので御座ゝやす」

「手前は同じく伊勢松と云ふ者で御座ゝやす、切望お見知り置を願ゝたう御座ゝます」

「ウム、新傳馬町の青柳親分新吉の身內か、ムウ爾うか、身們は仙藩の組士、山田平太郎の隱居平內と申す者ぢや、見知り置ッ」

「有がたい仕合で御座ゝます、お名前は豫て伺つて居ります」

「切望お盃を頂戴いたしたう存じます」

「ウム爾うぢや、恁う互ひに、知己になれば遠慮するには及ばない、膝を崩して酌うではないか、なア有藏」

「へゝ、寔に有がたい事で、オイ伊勢州、先刻誂へた物を此方へ失禮ぢやあるけれども」

「へゝ、畏まりました」

と次の間より持來たりし酒と肴を差出し。

「是れは寔に失禮で御座ゐますが、お親知己の印に献上いたします」

「異つた物でも御座ゐやせんが、切望召食つて戴きたう御座ゐやす」

「イヤ、是れぢやア却つて氣の毒だつたなしたか、二個の衆、お互ひに飲には、遠慮があつては旨うないわさ、此方へ來て一座になつて酌やれ、俺も幸ひ、一人で淋しく飲で居た處ぢやで、なア伊勢松とやら、爾ういたさうぢやないか」

「ぢやア伊勢州、旦那のお詞に隨つて、爾う爲やうぢやねゐか」

「ぢやア爾う願ひやせうか」

と二人は、煙管煙草入など持運び來たりて頻りと酌みながら、山田平内の機嫌を取れば山田も興に乘じて、二人を相手に酌交しはじめた。

「イヤお身達も、男を賣者であつて見ると、昨今の樣に世の中が、無事泰平では面白くないぢやな、如何云ふものか世間の鼓虫們は、俺の姿でも見るものなら、十間も先から路を除け、又酒を一升購から酌などゝ勸めるものなら、身を顫はして逃ると云ふ腰拔們ばかりや、アハヽヽヽ、然るにお手前們は、流石に男を磨く連中とて感心な者ぢや、進んで俺に親知己にならんと云ふは、天下の泰平を願ふ者は腰拔武士、俺などは天下相なるべくは事あれと祈るのぢやアハヽヽヽお手前們も爾うぢやらう」

「へゝ、如何も旦那の仰やる通り、男と生れました上は、世の中が無事泰平ぢやア面白う御座ゐやせんからな」

「花は櫻人は武士と申しやすが、山田の旦那などは、眞實の花なら櫻で御座ゐやすな」

「違ねねえ、旦那などは眞くの櫻の花だ、なア、咲いた櫻にな廿駒繁くかねッ」

「駒が跳れば花が散るアハ、、、、」

心の中に一物ある有藏伊勢松の二人は、上が上にも山田の機嫌を執れば、山田は愈よ興を増して互ひに打和た、時こそ好しと有藏は聲を低め。

「なア伊勢松、花の中の櫻とお見蒐申す山田の旦那に、例の一件をお頼み申せア、屹度俺們の胸も霽ると云ふものだが、這麼事をお願ね申しちやア濟ねねな」

「併し俺們も男の端くれだ、其の男が旦那を花の櫻と見てお願ね申すも、なア面白ねぢやねねか」

「ウム何か俺に、相談爲たいと云ふ事でもあるのか」

「へゝ、實ア旦那を武士は櫻と見て、お願ね申してね一件があるので御座ねやす」

「何、拙者を武士中の武士と見て、憑みたい事があるッ、ウムそれは面白い、而て其仔細は何ぢやな、モウ恁うなれば兄弟分も同樣の仲ぢや、如何なる大事でも心配するに及ばない、打明けて相談せね、何ぢやな」

「ぢやア申しやすか、山田の旦那のお力で血の雨を降して戴きてねんで」

「何ッ、身們に血の雨を降せろッ、不思議な事を申すな、而て其の血の雨を、何處に降せよと云ふのだ」

と、流石に無法武士も悸然した。

《引續き後編を讀まれたし》

橋本作著　埋木庵君錄

憐なる母と娘　全二冊
姉と弟　全二冊
毒百合　全三冊
浮寢鳥　全二冊
難波の夜嵐　全一冊
血染の吹雪　全三冊
お雪幸七　全三冊
菩薩小僧　全四冊
片破れ月　全一冊
繼しき母　全二冊
櫻貝　全二冊

上記の通りいづれも樋口隆文館より出版いたし居候

お雪幸七　終